国文学研究資料館紀要　第五号（一九七九年三月）

山岸文庫本

栗栖野物語（仮称）

―解説と翻刻―

伊井春樹

要旨　山岸徳平博士蔵の「物語古写本」（黒川本）と題する中世擬古物語を翻刻するとともに、初めに年立・系図を付した。今のところ他に類本を見ないため、仮に内容から「栗栖野（くるすの）物語」と称することにした。

本書はタテ二〇・一、ヨコ一三・九センチ、本文料紙は楮紙、一面一四行書き、墨付四三丁、袋綴の一冊本。表紙は白地に薄藍による唐草摺模様、左肩に「物語古写本　全」と打付書、遊紙の下方と巻末に「筒井蔵書」の円形朱印、本文第一丁の右下には「黒川真頼蔵書」「黒川真道蔵書」の方形朱印が見られる。書写年代は江戸中期かと思われる。また巻末には、

黒川本　筒井文庫蔵本也、昨春借覧後、俗事多端無返却之期、偶然聞筒井氏蔵書処分、乃船橋坊筒井氏黒川本悉皆譲渡テ実践女践(ママ)之件談合了、氏為所贈本書於余之書架云々、六月廿日記

との、山岸徳平博士筆による入手にいたる識語が付される。船橋市の筒井政憲氏旧蔵（筒井文庫）黒川文庫は、昭和二十五年に実践女子大学が一括購入したが、その折本書は山岸文庫に襲蔵されることになったらしい。右はその間の事情を記しているようで、また「六月廿日記」とするのは、同じ昭和二十五年のことであろう。

この物語の成立については、まだ確たることは言えないが、内容的には南北朝期あたりであろうか。恋愛物と合戦譚との組み合せによる擬古物語で、従来知られていなかった作品である。詳細についてはいずれ明らかにしたく思っているので、ここでは本文の紹介をするとともに、それを知るよすがとして年立と系図を示すにとどめておく。

（付記）本書の調査にあたっては、山岸徳平博士からの御厚情を賜るとともに、翻刻についても積極的におすすめ下さり、心から深謝する次第である。なお書名については、お願いしていたものの、お手紙などでも自由にとのお話しであった。それで「山岸本物語」とか、冒頭をとっての「さるほどに物語」とか考えはしたが、姫君の生れ育ち、回想もされる「栗栖野」をさしむき用いることにした。

〔年立〕

さだふさ年齢	月	日	事項	丁数
14			○さだふさ、栗栖野姫と契る。	
15			○さだあきら（さだふさ長男）誕生。	
16			○大姫君（さだふさ長女）誕生。	
17				
18			○さだふさは、将軍よしもりの隠謀により、無実の罪ながら出羽国へ配流。栗栖野姫、須磨に捨てられる。老尼に助けられ、一の谷に住むようになり、やがて五月五日に若君（よしふさ、さだふさ二男）を出産する。	一オ
19				
20				

21	22	23	24
			四月上旬
			同十九日
			同二十日
			同二十一日

○権中納言さだふさ、出羽国に籠城して七年目となる。都では、筑紫の将軍よしもりが横暴をきわめるふるまい。　三ウ

○さだふさに赦免の綸旨。さらに、よしもり追討の宣旨が下される。　四オ

○さだふさ、東海道の御家人十万余騎を率いて上京。　四オ

○さだふさ勢、近江国瀬田の橋まで進撃。よしもり勢は西洞院を城郭とし、上皇・主上を移し、守備を固める。　四ウ

○さだふさ、西洞院を攻撃して合戦となる。院・天皇を救出、よしもりと左大臣さだみち（さだふさの兄）は、一旦都を退く。　四ウ

○大宮面で合戦が再開される。　九オ

○よしもり・左大臣勢は伏見に籠もる。さだふさは攻撃し、二人を生け捕りにするとともに伏見殿に火をつける。そのほか、葉室大納言は生け捕り、千葉中納言、吉田三位は討ち死にする。　一〇オ

○さだふさはよしもりの首を刎ね、左大臣を預ることにする。　一一ウ

同二十二日	○嵯峨に隠棲していた今出川殿下は帰京し、さだふさと父子の対面をする。	一一ウ
同二十三日	○主上は二条内裏へ、上皇は院の御所へ還御。	一二オ
同二十四日	○除目が行なわれ、今出川相国は殿下に還任、さだふさは権大納言となる。	一二オ
	○太宰府勢の攻めのぼろうとする動きを察知し、権大納言さだふさは、岩瀬・北条・秩父の兵十万余騎を遣わす。	一二ウ
六月頃	○さだふさは、高倉殿を修復して移り住む。	一二ウ
	○太宰府の合戦で、反乱軍の右大臣もりつな将軍は自害。一族の筑前中将もりさね、源侍従よしつなは遁走。岩瀬まさつなに勧賞として筑前国を与え、九州を平定させる。	一三オ
	○左大臣さだみちは大原で出家。	一三オ
	○さだふさは栗栖姫の行方を探し求め、六十六ケ国に六十六人の使者を立てる。	一三ウ
八月七日	○院の女五宮、さだふさに降嫁。	一四オ
同中旬	○一の谷の尼君没す。亡骸を葬る。	一四ウ
同十六日	○一の国の国司万里小路中納言は姫君（五月五日生まれの七歳）の業病を直すため、雑仕に同年同月日生まれの童児の生肝を取って来るように命じる。食料を求めに一の谷から里に出ようとして道に迷った若君（よしふさ）をみつけ、生年月日が同じであることを知り、命を奪おうとするが、その美しさに感じて侍たちは許す。	一五ウ

○栗栖姫は若君の帰りの遅いのを案じて、庵から探しに出かける。若君は帰庵して母と行き違いとなる。 一七ウ

○近衛左大将は立願によって住吉へ社参し、下向の折難波・一の谷を見物する。そこで木の根もとに倒れ伏していた姫君を発見し、里の宿で看病する。 一八オ

○同じ宿に四十余歳の大輔の乳母と、二十六、七の女房中将が泊っていた。二人は、姫君が須磨に捨てられて以来七年もの間、その行方を探し求めていた。このようにして、姫君は近衛左大将の妹であることが分かり、二人の女房とともに上京し、父の近衛大臣とも対面する。 一九オ

○近衛殿と今出川殿とは、摂政の争いによって仲が不和。院の五宮とのこともあって、大納言さだふさには栗栖野姫発見のことを知らせない。 二一オ

○大納言は、宮中から退出する途中近衛殿の前を通りすがりに、聞き覚えのある琴の音を耳にし、かいまみをして、それが栗栖野姫であることを知る。 二三ウ

○大納言は大輔乳母の手引きにより姫君のもとへ忍び入るが、隣家の火事騒ぎで、思いを遂げることができない。父大殿は大納言の文を見つけ、乳母に手引きを禁ずる。 二六オ

○院の第五皇子桂宮は、春宮になれないのを恨み、九州の勢力と通じて謀反を企てる。 二八オ

十一月

○九州の反乱軍が上京するとの噂が流れる。出羽の太郎・次郎を大将として、 二九オ

25

	六万余騎を遣わすが、九州勢の強大さに一旦中国まで退き、京都に援軍を求める。	
十一月二十七日	○さだふさは、東国勢七万五千騎を連れて、自ら西海へ赴く。	二九オ
	○桂宮は謀反の発覚する前に紀の国へ下ることにし、栗栖姫君を奪い取って近江路をさして逃げる。大納言はすぐさま引き返し、打出の浜で追いついて戦い、姫君を奪い返す。桂宮は坂本へ逃げ入る。	二九ウ
十二月初め	○さだふさ将軍は、姫君を都へ送り届け、そのまま津の国の難波の浦から、七百八十余艘の兵船で筑前の国へ赴く。	三一オ
	○将軍は太宰府へおし寄せ、反旗を翻したたけかつ（岩瀬まさつなの弟）勢を攻撃する。たけかつは、肥後・周防・伊予国河野氏のもとへ逃げるが、追撃して滅ぼす。	三二オ
二月十三日	○将軍さだふさの凱旋。帝の御感によって右大将に任じられる。	三二ウ
	○桂宮は延暦寺で出家していたが、ほどなく還俗し、北国勢にさだふさ追討の令旨を発する。これも一院・女院の計画とのことで、天皇との間も仲はよくない。	三三オ
三月上旬	○たかすけ・たかなりが、西海道を完全に平定して上洛する。	三三オ
四月十日余	○堀川中納言の仲介によって、今出川殿と近衛殿は仲なおりをする。近衛大殿は、花宴を催して、右大将さだふさを自邸に招く。栗栖野姫君との仲が許さ	三三オ

れる。

○右大将は、一院の女五宮のもとへも、人の批難のないよう変らずに通う。しかし、女五宮の乳母などは、さだふさを悪しざまに言う。 三六オ

六月頃

○右大将は近衛の姫君（栗栖野姫）を高倉殿へ迎え入れようとするが、八月に出産の予定とて、しばらくは近衛殿に通うことにする。 三六ウ

八月十五日

○姫君は悩みがちとなる。一院の姫は、しばしば近衛の姫君のもとへ赴いて苛む夢を見る。 三六ウ

同二十一日

○姫君の病状はさらに悪くなる。十五日の暁方から出産の気配だが、一向に生まれない。女五宮のもののけによる。 三六ウ

○姫君は絶え入ってしまう。帝から勅使によって薬が下され、それによって息を吹き返す。やがて男児を出産する。 三七オ

○若君五十日の祝いの準備。 三八オ

二月

○近衛姫君を、右大将は高倉殿へ引き取ることになる。 三八ウ

○中納言（近衛大臣の甥）は、姫君を見られなくなることを悲しみ、忍び入って歌を詠みかける。 三九オ

三月中旬

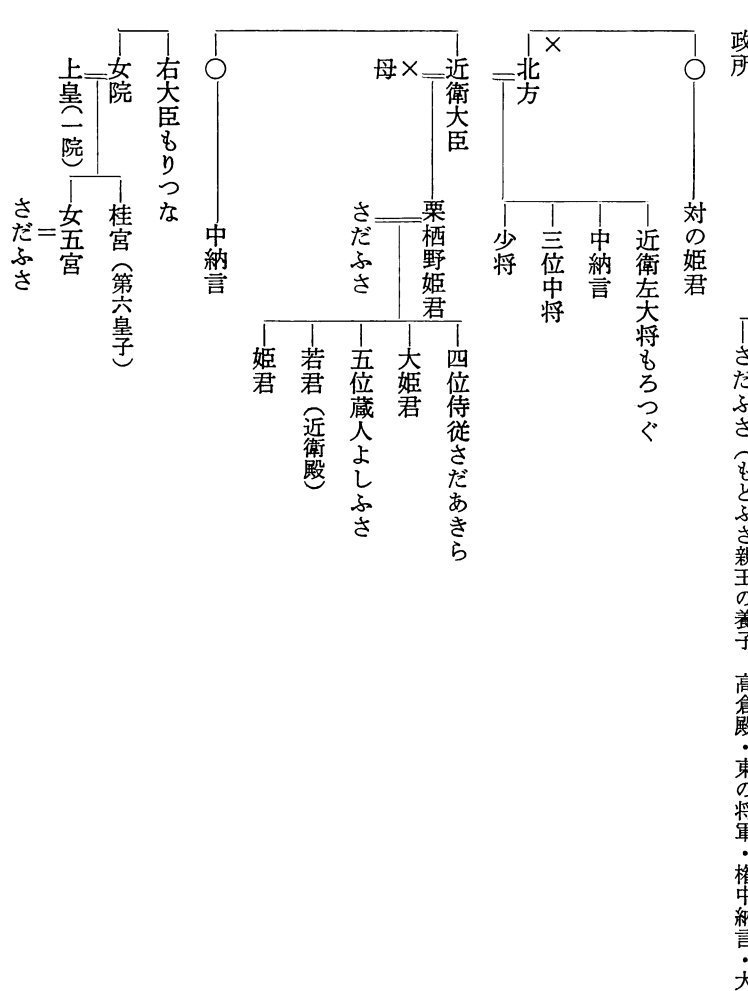
○桂宮の謀反によって、北国は騒動する。右大将の嫡子四位侍従さだあきら（十二歳）は元服し、大将軍となって北国へ討伐に赴く。 四〇オ

○桂宮は、密かに仁和寺で出家する。 四〇ウ

	四月八日	○院は、桂宮の謀反などのこともあって、桂院で出家。女五宮も、出家して同じ院に隠棲する。	四〇ウ
		○右大将は毎月昆沙門天へ参籠していたが、この月も鞍馬寺に赴く。そこで別当から、一の谷で見いだして養育している九歳の稚児が、右大将の子供の頃によく似ていることを聞かされる。母の姫君と一の谷ではぐれてしまった若君であることを知り、引き取って都へ帰る。	四一オ
	八月下旬	○近衛姫君に姫君誕生。	四二オ
27		○鞍馬の若君は十一歳で元服し、五位蔵人よしふさとなる。	四二ウ
28		○大姫君は十三歳で春宮へ入内し、女御となる。	四二ウ
29		○さだふさは左大臣に昇進する。	四二ウ
		○長子さだあきらは関東の将軍、次男よしふさは西国の将軍として太宰府へ下る。	四二ウ

※物語は、さだふさの十八歳から二十九歳までの間である。それ以前については、回想記事からの推定による。

〔系図〕


大殿（今出川・相国・殿下）
政所
さだみち（左大臣・関白）
さだふさ（もとふさ親王の養子、高倉殿・東の将軍・権中納言・大納言・右大将）
○
対の姫君
近衛左大将もろつぐ
中納言
三位中将
少将
×
北方
近衛大臣
母×
栗栖野姫君
さだふさ
四位侍従さだあきら
大姫君
五位蔵人よしふさ
若君（近衛殿）
姫君
○
中納言
右大臣もりつな
女院
上皇（一院）
さだふさ
桂宮（第六皇子）
女五宮

大姫君（さだふさ長女）
＝
一の皇子（春宮・帝）
帝
弟宮（帝）
＝
姫君（さだふさ二女）

〔凡　例〕

一、翻刻にあたっては本文にできるだけしたがったが、次の諸点に一部手を加えた。

1　漢字は原則としてすべて通行体に改めた。

2　読みやすさの便をはかるため、私に改行したり、会話文・心内語には括孤を付した。

3　句読点・濁点についても、同じく私に付した。

一、虫損の箇所は空白とし、その傍に推定できる語句については私案を示した。

一、意味不通と思われる語句とか明らかに誤写と思われる部分には、傍に（ママ）と付した。

一、本書には歌が八首引かれるが、それには一連の番号を付した。なお、そのうち一は、「ふるごと」と記すように拾遺集（巻十四、八七〇）の右近の歌である。

さるほどに、すまの浦にすてられ給ひし姫君は、あらきはまべにたをれふし、なきしほたれておはしけるが、「かくて人にみつけられなば、又うきめにあふ事もや」とおきあがり給ひ、「なさけなかりし人のあたりをはなれいでたるこそうれしけれ。今はうみにしづみ、こひしき人とおなし道にゆかばや」とおぼしめし、なく〳〵たちてみぎわのかたへあゆみ給ふ所に、いづくともなくうつくしきどうじ一人きたりて、姫ぎみに申やう、

「あらきなみまにかくれんより、いかにも命をまたふして、つまの行ゑをきゝ給へ。いまだ此よにある人なれば、ついにはあわせ給ふべし」

といふかとおもへば、あともなくかきけすやうにうせにけり。

姫君ふしぎにて、「これは仏神のをしへなるべし。さらば、身なぐる事をばとゞまるべし。さありとても、此はまにありはつべき事ならず。道あるかたへゆかばや」とおぼしめし、はかまのそばをたかくとり、あゆみ給ふぞいたわしき。いつならはしの事なれば、御あし（一才）よりもあゆるちに、はまのまさごもくれなゐのちしほにこそはなりにけれ。一ちやうともあゆみ給わず、こゝにたをれ、かしこにやすらひ、なき給ふより外の事ぞなき。ことゝいかはす物とては、すさきにさわぐなみのおと、おきつしほ風ふきしほり、おもひをすまのうら千鳥、ともまどはせるこゑならでは、あわれをとふべき物もなく、よのほのぐ〳〵とあくるまでおなし所にたどりつゝ、たもとをぬらし給ひける。

かゝりける所に、七十にあまり八じゆんにちかきにこう、かうぞめの衣におなし色のけさかけて、はとのつえにすがり、すいしやうのじゆずつまぐり、山中より出てはまにくだりけるが、姫ぎみをみつけいとふしぎにおもひ、御そ

ばちかくたちより、つくぐくとまぼりて申やう、

「御身はいかなる人にてましく候ぞ。此へんにては、いまだかやうなる人をみ申たる事なく候。行ゑを御かたり候へ」

と申ければ、姫ぎみとふにつらさのまさる身は、いかゞはこたへ候べき。

「もしなさけある人ならば、みやこの人のかよはぬ所にかくしおきて給われ」

と(一ウ)、なみだとともに仰けり。らうにもさるものゝはてなれば、「何さまたゞ人にてはあらじ、みめかたちたぐいなくかゞやくやうにみへ給へば、くげ、大じんのみむすめ、まゝはゝこなどにくまれすてられやし給ひけん。さなくはりうぐう、じやうどよりあまが心を引みんため、りう女のあがり給ふか」と、とかくけしきをうかゞへども、すさまじげなる事はなく、たゞしほくとなきふし、打むつけたるかほつきは、たとへん物ぞなかりけり。にこうおもふやう、「たとへいかなるへんげの物にてもおわせよ。かゝるうつくしき人を、いかでかみすて申べき」とおもひ、

「みぐるしくは候へども、わらはがいほりへいらせたまはゞ御とも申さん」

と申ける。ひめぎみきこしめし、

「それは何よりもうれしう候べし」

とおほせければ、らうによろこび、わがすみかへ御ともしてぞかへりける。にこうなさけありて、なゝめならずいたわりはぐゝみまいらせけり。こゝにてわかぎみむまれ給ひけるを、らうにかいぐくしくそだてたてまつる。

此姫ぎみと申は、こんゑお（二オ）ほきおとゞの御むすめ、あめが下にあふぐもしるきみかさ山、こだかくかゝるふぢなみの、色もにほひもなつかしく、たぐひなきよそおひ、又人なくおわすれば、女御きさきにもそなはり給ふべ

けれども、かげのこぐさのたねぞとて、ちゝおとゞにもしられずしてさだふさ卿にまみへつゝ、心ざしあさからずれんりのちぎりをなし給ひ、ぎよくろう金でんにしきのちやうのうちにおきふしあいしられ、いつきかしづかれ給ひし人の、いつのまにかはかはりはて、此よのうちともおもわれぬ、人せきたへたる山中に、しばおりふけるあんじつ、竹のはしらのふし所、あさましげなるしばの戸に、あけくれながめゐ給へる、心のうちぞいたわしき。

とし月のすぎ行まゝにみやこのかたもおぼつかなく、恋しき人のおもかげ御身にそふる心ちして、ひとりなげき、ひとりかこち、つきせぬ御なみだにくれなゐふかき御かほのにほひもうつろひ、みどりのまゆもみだれつゝ、物おもわしき御有さまいとゞみるかいありてうつくしうおはしければ、あま君あわれにかなしくてとかくなぐさめまいらせけり。たま〳〵（二ウ）ことふものとては、こずへをつたふましらのこゑ、ふもとにつまこふしかのね、たへぐおつる山水、ほどなき軒をもる月かげ、みねのあらしのおとならではあわれをかくる物なく、いとさびしげなる所なり。ざうりぞくりがいにしへ、わうしやうくんのこ国のたびも御身の上にしられつゝ、御そでのかはくひまもなし。あさ夕のいとなみをもはこびてまいらする人なければ、あまぎみぞさとへいでゝ、とかくこしらへてはぐゝみ申けり。

東のしやうぐんは、でわのくにゝとし月をおくり給ふまゝにふる郷のみこいしく、大との、まん所の恋なげかせ給ふをきこしめすにつけても、うつてやのぼらましとおぼしめしたつ事おほけれど、りんし、ゐんぜんをもかうぶらずしては、てんのおそれもいかゞとつゝしみてすぐされけるゑんりよのほどこそしんべうなれ。つねにゆかしうおもひいで給ふ人〳〵おほき中にも、北のかたのおもかげはよとゝも御身にたちそひ、ひとりねのよな〳〵御心をいたましめずといふ事なし。のどかなる春の（三オ）日ももう〳〵とながめくらし、つれ〴〵とながき秋のよはつまこふしかにねをあらそひ、きうか三ぷくの夏の日もたへがたく、げんとうそせつの冬の夜はかさねふすまにあらしをいとひ、

人しれぬ御なみだにそでをしぼり給ひける。ろうじやうしたまひてもはや七とせにぞなりにける。みやこにはつくしのしやうぐんのおごりいよ〳〵ちやうじ、君をもきみとしたまわず、我まゝにふるまい給ふ事あげてかぞへがたし。院のひめ宮をもないがしろにもてなし、ゆふ女をあまたならべおき、よるともいわずひるともなくあそびをのみこのまれければ、君も臣もやう〳〵うとみ給ひけり。されどくわんぱく殿はもとよりしたしき御事にて、今もかはらぬ御中なり。かゝるにつけてもみかどは、東のしやうぐんのゆゝしかりしふるまひをおぼしめしいだされぬ折なく、こいしのばせ給ふをみたてまつり、むかしよりさだふさ卿にこゝろよかりし大臣、くぎやうおなし心にいひあわせ、ごん中なごんにとがなきよしを折〳〵そうもん申されけり。もとよりしゆじやうは御にくみふかゝらざり（三ウ）し人の事なれば、やがてきこしめしあきらめ、御しやめんのりんしをあそばし、みなもとのよしもりてうてきたるあいだいそぎたいぢすべきよし、ひそかにさだふさしやうぐんのもとへ仰下されたりければ、ごん中なごん大きによろこび、御しやめんの御りんしをいたゞき、ちよくでうのおもむきかしこまりうけたまわりたるよし申されけり。しやうぐん、

「さらばうつてのぼるべし。さりながらわれのぼるとしりたりせば、ぎやうかうをも、ごかうをもさいごくのかたへなし申べし。さあらばいくさむつかしからん。いかにもひろうなせそ」

とて、ひそかにせいをもよほされけり。

東かいだうの御けにんつがう十まんよきを、五手にわけて五どに上らくす。まづしやうぐんはくつきやうのつわ物をえらび、わづか五千よきにて一ばんにのぼらせ給ふ。しのびての事なれば、五千よきがむら〳〵になりてかいだうを上らくす。二ばんにいわせのみんぶ、二万よきにてうつてのぼる。三ばんにほうじやう三万よき、四ばんにちゝぶ二万五千よき、五ばんにうきしまひやうへ二万よきでぞのぼりける。しやうぐんは卯月はじめにでわのくにをたちた（四オ）まふ。みやこにはこれをばゆめにもしりたまわで、花のん、月のくわいなどゝて、ゆふけうにほこりておは

します。左大臣殿やふしみどのゝ心のほどこそあさましけれ。ごん中なごん殿は、おなしき十九日あふみのくにのせたのはしにぞつかれける。此よしみやこへきこへければ、らく中のさわぐ事なゝめならず。上くわうはおどろかせ給へども、しゆじやうはさはがせ給わず。さふやよしもり卿は、かねてよりおもひまふけ給わぬ事にもあらねど、さながらけふあすとはおもはざりつるに、「こわいかにせん」とさわぎ給ふ事かぎりなし。さてあるべき事ならねば、よしもり中なごんの、此比つくられけるにしのとうゐんのやかたをじやうくわくにこしらへ、ぎやうかうをもごかうをもなしたてまつり、五きないのつわ物、ざいきやうのぶしどもをめしあつめけるに一まんよき有けるを、とうゐんどのにこもらせしゆごさせ給ひける。

廿日のうのこくにさだふさ卿うつたゝんとしたまひけるが、よしもりぎやうかうをもごかうをも我しゆく所へなし申されたりときゝ給ひ、しばらくひかへてあんじられけるが、しやうぐんのたまふやう(四ウ)、

「いかにくつきやうのじやうくわくなりとも、こもられたる大しやうたち心にくゝもあらず。その上せいもぶぜいなりときけば、おしよせてこん日のうちにせめおとさん事いとやすけれど、君をなやましたてまつらんがなんぎなれば、はかりごとをもつててきをぞひきいだし、みかたのぐんぜいを入かへば、さだめてよしもりふしみをさしておつべし。さあらん時におつかけてうたん。てうてきといひ、おやのかたき一かたならぬてきなれば、よしもりをば人でにはかくまじ。さだふさがてどりにせん」

とぞのたまひける。

さて五千よきを三手にわけ、二千よきにてあふてへごん中なごん殿むかわせ給ふ。千五百よきをばでわの太郎引ぐし、からめてへむかふ。残千五百よきはうしろづめにひかへたり。あふてからめて三千五百よき、みのこく斗ににしのとうゐん殿へおしよせ、時をどつと上にけり。じやうの内にもせいを二手にわけ、おふての大やうぐんには、左大

臣くわんぱく藤はらのさだみち二郎六千きにてにしのもんをかため給ふ。からめての大しやうぐんは、みなもとのよしもりよきつわもの（五才）四千よきにてひがしのもんをかためられけるが、いづれも時のこゑをあわせけり。たがいにしばらくやいくさして時うつりければ、うちものゝさやはづし、おふつおわれつたゝかいける。かねてたくみし事なれば、からめてのよせてせめあぐんだるていにもてなし、かはらをさして引しりぞく。てきがづにのりて、「いづくまでものがすまじ。かへせ、もどせ」とておつかけたり。そのひまにおふてのせいもにぐるよしにもてなし、やがてひがしのもんより打入、うしろやにいかけける。のこしおかれしごづめのせいもかも川をはせわたし、ごん中なごんどのゝおはしますひがしのもんへくはゝり、さんぐにせめたゝかふ。さふ此よしを御らんじ、「すはこそさだふさにたばかられたるか。さらばきみをとりたてまつり、ふしみへこもらん」とおぼせけれども、大庭にてきみちくてさらに入たてまいらせねば、力およばずもんより外へ出給ひぬ。よしもりもてきをおひちらしてはせかへられけるが、にしのとうゐんへはてき入かはり、でんかもおひいだされ給ひぬときゝ給ひ、「あなあさまし。たばかり事としらずして（五ウ）、やすくとぞ引いだされける口おしさよ」とはがみをしたまへど、かいぞなき。「さらば、いかにもしてきみをとりかへし申さん」とて、よしもりきやう大手のもんへおしよせ、もみにもふでせめられける。源中なごんはぶぜい、みかたは小ぜい、いわせ、ほうじやうなどはいまだまいらず、ぐんひやうらたゝかいつかれてみへければ、しやうぐんつわ物どもにちからをつけんとやおぼしめされけん、「めんくがいくさのこだれてねむけなるめざましに、さだふさかけて見せん」とて、すゝみ出たまふ。

その日のしやうぞくには、あかぢのにしきのひたたれに、もえぎにほひの御きせなる。くわがた打たるかぶとのをゝしめ、こがねづくりの御はかせをまへさがりにはき給ひ、しらのに山どりのはにてはいたるやの、廿四さひたるをかしらだかにとつて付、むらしげとうのゆみのとりうちの所にびしやもん天わうとしゆにてかきしるし、まん中にき

りきりんといふめいばのふとうたくましきに、なしぢのまきへのくらおいてめされ、にしきのたづなかいくりさいもんに出たまふ有さま、中〳〵ゆゝしうぞみへられける。あぶみふんばりたちあがり、大おん（六才）じやうにてのたまひけるは、

「たゞ今このぢんへよせられたる大しやうを、みなもとのよしもり卿とみたるはいつわりにて候か。こう申はもとふさしんわうのやうし、さきのごん中なごんさだふさ、せんねんおもひもよらずむじつのつみにしづみ候へども、君きみにてましますゆへとがなき事をしろしめし、御しやめんをなされ、ぎへいをあぐべきせんじかうぶるによつて、ぎやくしんの人〳〵をたばかりしりぞけて候。とがもなき何がしにあたをなし給ふのみならず、もとふさしんわうをやみ〳〵とほろぼし給ひしうらみをもけんざんにて申さん」

とよばわりかけられたり。よしもりもこまかけいだし、

「君のせんじをかうぶり、ぎへいをあげたりとのたまふこそこゝろへがたけれ。てうてきの身として、一天の君をうばわんよりそこをしりぞき給へ」

とて、四人はりに十三束とつてからりと打つがい、やつぎばやのてきゝなればさん〴〵にゐたまひけり。さだふさ卿もしばらくあいしらいて後、れいのこだちをするりとぬきとんでかゝり給へば、よしもりかなはじとやおもわれけん、かいふつてにげられ（六ウ）けるを、半丁斗おわれけれども、大ぜいがたちへだゝりはるかにのび給ひければ、「これにはかぎるべからず。又こそまいりあふべけれ」とて、とつてかへされけり。さふ此よしを御らんじ、「みれんなるよしもりかな。さだふさなればとておなし人げんのたねなれば、いかほどの事のあるべきぞ。人ごとにおにかみのやうにおそるゝによつて、引まじき所をも引」とおぼへたり。

「いで〳〵さだ道むかつておふてをせめやぶらん」

とのたまひもあへずかけ給ふを、つわ物どもみまいらせ、
「おなし御きやうだいといひながら、御きりやうばつぐんにおとらせ給ひたる物を。おほけなき御たゝかいならん」
と申あいける。
とうゐんどのゝにしのもんへおしよせ、せつしやうどのゝ御めのとご山しろのかみくにかげ、大おんじやうにて申やう、
「此もんをかためさせ給ふは、さきのごん中なごん殿とみたてまつりて候。御しゆきやうさ大じん殿これまでむかはせ給ひ候に、御出あり御たいめんなされ候へ」
と、
「たれかある、御ひろう候へ」
とよばはりける。しやうぐんきこしめし、
「さだふさいづるにおよばず。あなにくや、きやつをてづかみにせよ」
と有ければ、おの〳〵たち、なぎなたひつさげもんぐわいへ（七才）おどりいで、こゝをせんどゝたゝかいけり。でわの二郎くにかげとむんずとくみ、いけどりにしてぞさんじける。さふのはかり事には、くつきやうのゆみの上ずをす。十人すぐり、みかたのぢんとうにひかへさせ、「ご中なごんかけ出ば、たゞ一やにいおとせ」と仰ふくめておかれけれ共、中なごん殿は出給わず。そのときおとゞ、
「さだ道がいでねばこそ、さだふさもいでぬなり。それがしいづるならば、さだめてしやうぐん出なん。その時やつぼをみすへていおとせ」

とてぞいでられける。
一ぢんにこまかけいだし、
「此ての大しやうは、とうのさだふさときゝたり。さだみちがよせたる事をしり給わぬ事あらじ。など出あいてけんざんをし給わぬぞ」
とたからかに仰ける。中なごん殿きこしめし、
「さらばまかり出ん」
と、やがてすゝみ出られけり。そのあいちかくこまかけよせ、
「さきほどよりまかり出御めにかゝりたくは候へども、もとより御ゐにしたがはざるくせ物とて、御ふきやうかうぶりたる身にて候へば、わざとひかへてさぶいらしなり。一たびはむじつゆへてうてきとなりて候へども、きみあきらかにましますにより、御しやめんをかうぶりぎへいをあげて候。いらざるぎやく（七ウ）しんにどういあらんより、すみやかにきみのみかたへまいらせ給へ」
とのたまへば、さふきこしめしもあへず、
「おことむほんをおこし、君をとりこめたてまつり、あにゝむかつてゆみ引ひが事をのみせんよりも、いそぎぎやうかうにぐぶしてこなたへくはゝれ」
とぞのたまひける。さだふさきゝ給ひ、
「君をとりこめたてまつるは、せんじをかうぶりての事也。あにゝむかつてゆみ引事、まことにぎやくのいたりにて候。たゞし君にたいしてたゝかい給ふおそれはいかに」
と申たまへば、さだ道此ことばにつめられとかうのへんじもなく、たゞ「いとれや、いとれ」とげちしたまいけるあ

ひだ、中なごん殿をめにかけわれも〳〵といたてまつるほどに、やのくる事あめのあしのごとし。されどもしやうぐんことゝもしたまわず、あがるやをばうつぶいてはづし、さがるやをばのびあがりてちがい、あるひはきつておとされけり。少々あたるもあれどよろひよければうらかゝず、御てもおひたまわず。よせてたぜいなりければ入かへもみかへたゝかふほどに、きど口までつめよせたり。しやうぐん御らんじ、「いや〳〵もんの内へいれたてゝはあしかりなん(八オ)。大しやうをたちかせにて、そつとおとし引しりぞけん」と思ふなり。でわきやうだいは、

「つゞけ、のこりの物はけん物せよ」

とて、ゆみとやをばからりとすて、御はかせひんぬいて大臣殿にかけむかい、

「とてもかんだうゑたる身なればしんぎのれいをもやぶり、じきにしやうぶをつかまつらん」

とちかづきより給へば、でんかあるべうもなしとおぼしめし、へんたうまでもなくたづなかいくつてにげ給ふ。さだふさ卿、「こわいかに、おそれをなしいでざりつるを。わざとめしいだしたる物かな」とすげなうみへさせ給ひ候ぞ。

「いづくまでも御ともつかまつり候らわん」

とて、むちをあわせておひ給ふ。でわきやうだい六人、ぜんごさうにうつほどに、たゞなるかみのごとくなり。おゝいどのはかへりみもせずにげ給へば、かはらおもてまでおっちらしてしやうぐんはかへられけり。その日もすでにくれければ、たがいにぢんを引れたり。

しゆじやう、ごん中なごんを大ゆかへめされ、「此とし月さんしんのむじつにより、たこく、へんどにさすらへさせうきめをみせし事、たゞまろがひが事なり。今までのりをまげ、わうだうをみだすげきしんをすみやかにた(八ウ)いぢあるべき」のむね仰下されければ、さだふさかしこまつてうけたまはり、「むじつのつみにしづむためしむかし

よりなき事にしもさぶらはねば、きみに御うらみふくみ候事なにしに候べき。ちよくめいをかうぶりてうてきほろぼさん事、あんのうちにて候」よしそうもん申されけり。院よりも、「とし月のうらみをわすれ、てうかの御てきほろぼさるべき」よしゐんぜんなりければ、ごん中なごん、

「かしこまり入候」

とぞ申されける。さだふさのたまふやう、

「もしこんや、よしもりようちにやよせんずらん。てきは大ぜい、みかたはぶぜいなるぞようじんせよ」

と有ければ、つわ物どもかぶともぬがず、やなぐいもおろさであかしけり。

あくるとらのこくに、いわせのみんぶ二万よきにてまいりくはゝる。よしもりにもよのまにせいやつきたりけん、三万五千よきにて大宮おもてにひかへたりときこへければ、ごん中なごんどのまさつなに二千よきをあいそへとうゐん殿をしゆごさせ、御身はあらての二まんよきにて大みやおもてへはせむかはる。でんかはきのふ御おとうと中なごん殿にいたくおわれさせ給ひ、めんぼくなふやおぼし（九才）けん、けふのいくさには出給わず、ふしみ殿に引こもりておはしける。その外くぎやうにも、ふしみにこもり給へる人〳〵少々あるよしきこへけり。

さるほどに大みやにはたつのこくよりいくさはじまり、しのぎをけづりつばをわり、両ぢんの物どもこゝをさいごとたゝかいける。東のしやうぐん一ぢんにこまをすへいくさのげちしてゐ給ふさま、こと人にまぎるべくもなくゆゝしげにみへ給ふを、よしもりのらうたうきくちさへもんのぜう、

「これにみへさせ給ふわかむしやは、大しやうぐんとみ申たり。おそれおほく候へども子どものかたきにてましませば、なかざし一すじたてまつらん」

とて、よつぴきひやうどはなつ。やり、しやうぐんのめされたる御むまのふとはらにまふ□らかせめてたちければ、

むまはびやうぶをかへすごとくにたをるれば、ぬしはおりたち給ひけり。さだふさ御らんじ、

「たゞ今のやは、きくちがしわざとおぼへたり。そのらうむしやにがすな、うちとれ」

とおほせければ、でわの六郎はせむかい、きくちとくんでどうとおつ。たかしげぶさうの大力なれば、さへもんのぜうをとつておさへくびねぢきり、君のけざんに入て（九ウ）けり。

ごん中なごん殿はやがてのりかへにのり、よしもりをめにかけまつさきにすゝんでたゝかはれけるほどに、げん中なごんしばしもたまらず川をさつとわたし、にしをさしておちられける。さだふさ御らんじ、

「きたなし、よしもり。みれんなり。中なごん大ぜいにても候はず。れいの七きで候ぞ。かへしあわせてしやうぶしたまへ。いかに〳〵」

とておつかけ給ふ。たゞ七人におつたてられ、よしもりの大ぜいのこまのあしをとゞめかねふしみまでぞおちたりけり。大ぜいのつわ物もんのうちへにげ入、なかのはしを引、もんのくわんぬきちやうどさす。ごん中なごん殿これをことゝもしたまはず、ほりをゆらりとはねこへ、むかいのきしにたち給へるいきおひ、ほん人とはみへ給はず。出わきやうだいもつゞいてほりをはねこし、もんのよこぎを二ほんひきぬき、まん中をゆいあわせ、むかいのきしへなげこし、みかたのせいをわたしけり。じやうのうちには、さふも中なごんもさはぎ給ふけしきあさましげなり。ごん中なごん殿は一のきどをせめやぶり中もんまでせめ入給ひしが、よしもりをめにかけむまよりとんでおり、ひろゑんにつ（一〇オ）とあがり、きやくでんをのぼりに大てをひろげておひ給ふいきほひ、はんくわいもかくやらんとすさまじげにみへたりけれ。ついになんでんのすみのまにておつつめ、むずとくんでふせ、かぶとちぎりからりとすて、

「いかによしもり、かうさんしたまはゞたすけん」

とのたまひける。よしもりもさる人なれば、

「何、かうさんとのたまふかや。てうてきといひ、ふてきといひ、さいあいのつまのかたきなれば、一かたならぬ
それがし、たすからんといわばたすけ給ふべきか。ほうをんには、とく〳〵かうべをはね給へ」
といわれければ、ごん中なごんもどうりしごくして、
「さだふさ一分のかたき斗にても候らはず。てうてきにてまし〳〵候へば、だいりへ引ぐし申さん」
とて、さきにたてゝぞ出られける。
左大臣殿はきやくでんのかたにうろたへておはしける所に、たかなりつとまいりろうごしをさしよせ、
「ちよくぢやうにてさぶらふ。たゞめされ候へ」
と申ければ、いかゞおぼしめされけん、おめ〳〵とのりて出給ひぬ。
くわんぐんはしりまわり、こゝかしこに火をかけければ、みやう火でんにみち〳〵、玉をみがきしふしみ殿へんしのけぶりと（一〇ウ）なりにける。しんのしくわうのおごり、かんやう宮のほろびしもかくやとおもひしられたり。大しやうぐんたちはわきながらとらはれ給ひ、じやうくわくけぶりとなりぬる上は、つわ物どもみなちり〴〵におちうせ、行かたしらずなりぞ行。はむろの大なごんいけどりになり給ふ。ちぐさのちうなごん、よしだの三位は、うちじにし給ひけり。
ごん中なごん殿は、さだみち、よしもりをさきにたてゝとうゐん殿へいられける。しゆじやう、上くわう御かんなゝめならず、さしものたいてきを二日があいだになんなくせめほろぼされけるぶりやくのほどを、かんじさせ給ひける。しやうぐんなんでんに出て、くびじつけんし給ふ。左のさかしらにはほうじやう、ちゝぶなをり、東かいだうの大みやう、小みやうならびゐたり。右のさかしらには、いわせのみんぶまさつな、さして北ろくだうの大みやう、小みやうひざまづきてれんざする。でわきやうだい六人は、しやうぐんの御そばまぢかくさぶらいけり。その外しよこ

くのぐんぜいいくらといふかずもしらず、ていじやうにひまなくなみゐたり。しやうぐんその日のしやうぞくには、ねりぬきにあかき（一一オ）いとをもつてぬいものしたるひたゝれに、くれなゐすそごのよろひ、こがねづくりのたちをはき、そめはのやおひ、かぶとをばわらはにもたせ、たぶさをみだしきざはしにしりかけてみなみむきにゐ給へり。生年廿四歳、わかくさかりにねびとゝのひ、さらでもゆゝしくおはしけるに、夕日の花やかにさしてもてはやされたるやうきたいは、心此よの人ともみへ給わず。しゆじやう、上くわうもわたどのゝれんじよりこれをゑいらんありて、

「あないみじ。此よにはありがたきぶしやうかな」

とぜんじなりける。よしもりはやうふのかたきなればとて、さだふさ卿たまわりそのよくびをはねられけり。さふは、さいごくのしづまるまでさだふさ卿あづかり給ふ。

さきのでんかはみやこのさはぎによりさがのあたりにしのびおはしつるが、ごん中なごん上らくまし〳〵てうてきことぐくほろぼし給ひぬときこしめし、御よろこびかぎりなく、あくる廿二日でわの三郎を御ともにて、今出川殿へかへらせ給ひけり。その日しやうぐん今出川殿へまいり給ふに、大しやうこくあまりの御うれしさに、中もんのらうまで出させ（一一ウ）給ひぬ。中なごん殿おりものゝ下がさねに、とくさ色のかりぎぬ、大もんのさしぬき、たてゑぼし引たてゝあゆみ入給ふ。もてなし、たいはいむかしよりはいたくおとなびいとゞみるかいあるを、大との御らんじ、「命あれば」と斗おほせありて、御そでをおしあてけるは御ことわりにあわれなり。ちごをかしづくごとくに、御袖をひきてれん中へ入給ふ。まちつけ給へりしまん所の御心のうち、いかばかりかおわしけん。とかうの事ものたまはず、御よろこびのなみだせきかね給ふ。わかぎみ、姫君いづれとなくうつくしうおひたち、しやうぐんのゆんで、めてにならびおはしてむつまじげにし給ひけり。姫君の色しろうさゝやかにて、打かほりたるまみ口つきのお

かしげなるが、はゝぎみによくに給へるを御らんずるより、あわれになつかしくおぼしいづることゞもあれば、打なみだぐみ給ひけるを、しやうこくもまん所もさぞとおぼしめしやりて、御そでをぬらされけり。

廿三日にしゆじやうは二でうだいりへくわんかうなる。上くわうももとの御所へくわんぎよりぬ、廿四日だいりにぢもくおこなわれて、今で川（一二オ）殿又でんかにかへりなり給ひ、さだふさ卿はごん大なごんにんぜられけり。此のちはしやうぐんのいきおひむかしよりはいやまさり、東かいだうは申におよばず、東せんだう、ほくろくだうも大かたなびきたてまつりぬ。

だざいふには、よしもりうたれ給ひぬときこしめし、御なげきなゝめならず。せめてかたきをほろぼさんため上らくあらんとぎせられけれども、中ごくよりひがしはみなそむき申によりそれもかなはずやすらひ給ふうちに、ごん大なごん殿たけき人なれば、だざいふをせめんとて、いわせ、ほうじやう、ちゝぶ、これ三人を大しやうぐんにて十まんよきあいそへ、もりつなこうのうつてにさしつかはさる。いそぎていとをうつたち、ちくぜんのくにへはつかうす。みやこのうちはおだやかにしづまりければ、君もしんも御よろこびかぎりなく、しづ山がつにいたるまでごん大なごん殿をおがみけるはことはりなり。此七、八ケ年はげきしんのおごりさかんにして、みやこの上下もいたみしが、今はいつしか引かへたみのかまどもにぎはひ、花やかなる御代とぞなりにける。しやうぐんはむかしのたかくらに御しよをつくらせ（一二ウ）、みな月のころうつり給ひぬ。だざいふのかつせんも、みかたにりあるによつてもりつなこう打まけ、ついにじがいし給ひぬ。しぞくちくぜんの中将もりさね、げん侍従よしつな、これ二人は行かたしらずおちられけり。つくしのうちにてにたつかたきあらざれば、もりつなの御くびもたせ、三人ながら上らくす。さだふさ大きによろこび給ひ、こんどのけじやうとしてまさつなにはちくぜんのくにを給わり、九こくのおさゑにとてすなはちださいふへくだりけり。ちゝぶ、ほうじやうにもくにをたまわり、おの〳〵ほんごくへかへりぬ。でわのぜんじが子

ども七人にもめん〳〵にけじやうをたまわり、その上こぜんじがけうやうねん比にとぶらはせ給ひけるを、たんごのめのともよにありがたくおもひ、みたてまつるぶし共かんぜぬはなかりけり。

いよ〳〵世の中おさまりければ、みかど御かんなゝめならず。大との申させ給ひけるは、

「左大臣大あくのてうてきなるあいだ、るざいにしよせらるべし」

とそうもん有けれど、しやうぐん申なだめておはらのへんにおきたてまつり給ひしが、つゐに御しゆつけしたまいけり。

ごん大なごん殿は北のかたの（一三オ）御事をあけくれ恋なげき、行ゑなしときゝつれば、「ふちせに身をやなげつらん。もしうきよにあるならば心ぐるしくみおきにしおさなき物もあるべきが、いづくのさといかなる所にていかさまにものをおもふらん。ひとりねのよな〳〵はむねをこがすあかつきおほく、さだふさをこいしくおもひ出なん」など、さま〴〵におぼしつゞくるほとに、ねざめごとの御枕の下はあまもつりするばかりにて、かんのぶていのいにしへも浦山しくぞおぼされける。はんごんかうをもたざればけぶりにたぐふかげもみず、ゑきろのすゞのなければふりてなぐさむ事もなし。よるもとけてまどろまねば、ゆめにだにみぬうらめしさよと人しれずなげき給ひつゝ、つねはながめがちにのみおわしけるを、ちゝおとゞきこしめし六十六ケこくへ六十六人のししやをたて、北のかたの御行ゑをたづねさせ給へどさらに行かたましまさず。でんかもまん所もほいなき事におぼしめしなげくに、しやうぐんはこんどおほくのかつせんにすゞろに命のおしかりしも、此人に今一たびあいみんとおもひ（一三ウ）しゆへぞかし。ありしをついのわかれにて、さて世にありはてんとはおもわれたまわず、よとゝも此事をのみかなしみ給ひけり。上くわうはもとより女五の宮の御ことをほのめかしそめさせ給ひつる事なれば、今はのがれがたうひたすらに御けしき給わりければ、しゐてもいなび給わずでんか御うけを申させ給ひぬ。大なごん殿はかくときこしめすより、「あなあ

さまし。ゆめまぼろしのよの中におもわぬ人にちぎりをこめ、こいしき人をしのばんよりとにもいかにもならばや」とまでおもひ給へど、ものゝふの大将たる身が、女ゆへに命をうしないたるなんどゝさたせられんも口おしかりなんとおぼしめしなをし、つれなうもてなしてすぐし給ひぬ。

女五の宮の御ことは八月七日とさだめられ、世の中ひゞきていそがれける。しゆじやうはさだふさのうけひかぬときこしめし、宮の御ためいとおしくおぼしめされけれど、一ゐんのかくいそがせ給ひければとゞめまいらせらるゝにもおよばず、かたはらいたき事におぼされける。すでにそのよになりぬれば、大なごん殿なげく〳〵まいり給（一四オ）へり。まちつけ給へる宮の御かたのぎしき有さま、花やかにめでたき事いゐばさらなり。姫君の御かたちぞよそにておもひやりしよりはもの〳〵しくねびすぎ給ひ、きら〳〵しくうつくしうおわする事はなべてならねど、くるすのゝ花の夕ばへにはにもにずこよなうおとり給へり。これにつけてもさる山ふところにおひいでし人の、露斗もみおとりたる所なく、はかなきあそびわざまでもめづらしくおかしきさまにしいで、たぐいなかりし人のおもかげいとゞこいしくおもひいでられ、とけてもまどろまれ給わねばよふかくかへり給ひけり。此のちは一ゐんのむこの君とていとゞひかりそひてもてなされ給ひけれど、大なごん殿はたゞむかしの人のみ御心にかゝり人しれず物をおもひ、宮の御かたへもしげうもまいりたまわず、ともすればたかくら殿にこもりゐて、ひとりながめふし給ひぬ。

さても一のたにのひめ君は、しやうぐんのよに出給ふをもしりたまはず月日をおくり給ふほどに、わかぎみ七歳といふ八月中比に、にこうむなしくなり（一四ウ）ければ、姫君なげき給ひ、むなしきかしらをひざにのせ、「日比はにこうのなさけにてこそとし月をおくりしに、今よりのちはたれをたよりにて露の命もながらへん。おちこちのたづきもしらぬ山中に、おさなき物をすておき給ふかなしさよ」とて、もだへ給ふぞことわりなる。わかぎみはにこうのてをとらへ、

「いかにあまぜ、はゝ君や身づからをふりすててていづくへとておわするぞ。かさねては行給ふとも、此たびはかへり給へ。のふ、あまぜやゝ」

とてあしずりをしてさけび給へども、さりてかへらぬこうせんのたびのかなしさは、御いらへ申事もなくかわり行事のみありければ、ひめぎみ、わかぎみにくどき給ふやう、

「今はいかほどなげくとも、にこうはかへり給わじ。何ともしてしがいをかくさばやと思ふが、いかゞせん」

と仰ける。わかぎみきこしめし、こざかしげにのたまふやう、

「そのことは御心やすくおぼしめせ。つねにかたらひてあそび候しゝ、さるにいひあわせて、よきにはからいさぶらはん」

とのたまひけるぞいとおしき。その日のひるつかたさとの物一人きたりて、なさけをかけてとぶらいければ（一五オ）、せめての事にかれをたのみ、にこうのしがいをやうゝかくし給ひぬ。ひめぎみはむしよにむかい、なみだをながしつゝきやうよみねんぶつしてとぶらひ給へば、わかぎみたにゝくだり水をむすびてたむけ、花をおりてさゝげ給ふ。

らうにのありしほどは、よひゝごとのぬかのこゑかねのねをもきゝ給ひしが、それも今はおとたへてくるゝよごとにおとづる□（虫損）はやかんのものゝこゑ斗、物すさまじくぞきこへける。四五日すぎけれどくごをまいらするものもなければ、わかぎみあまりにたへかねかてをもとめんためさとへいでたまひしが、おさなき人のかなしさはしらぬ道にふみまよひ、かなたこなたとありき給ふ。

その比一のくにのこくしをばまでのこうじの中なごん殿と申けるが、一人のひめぎみをもたれけり。御とし七歳五月五日のたんじやうなるが、ごうびやうをうけばんじかぎりにおはしける。ちゝはゝなげきかなしみ、くすりいのり

をつくし給へど何のしるしもなかりける所に、あるはかせの申やう、
「いかなるものゝ子なりとも、此ひめぎみと同年のおなし月日にむまれたるなんしのいきぎもを、とりてくすりに（一五ウ）もち給はゞへいゆうあらん」
と申ければ、ちゝはゝこれにちからつき、さぶらい二三人にざうしきをあいそへ、
「いかなるものゝ子なりとも、たばかりていきぎもをとりてこよ」
とていだされけり。こく中をたづぬれどぬすみとるべき子もなければ、むなしくかへらんとする所に、此わかぎみをみつけ、
「少人はいくつになり給ふ」
ととい申。わか君何心もなく、
「七歳になる」
と仰ける。
「さてたんじやうの月日をばしりたまへるか」
「いさとよ、まろはよくもしらず。たんごととかやにむまれつると、はゝぎみのたまいつる」
とありのまゝにのたまひけり。かの物ども大きによろこび、
「いづくへおはしまし候ぞ。御とも申さん」
とて、やがてかたむまにのせ申す。わかぎみ御らんじ、
「これはいづちへぐしてゆくぞ。はゝのまします所へか」
とおほせけるこそいたわしけれ。せきじつにしに入ければとある山中へわけ入、しきがわをしきておろし申せば、わ

かぎみかしこくみとり給ひ、

「まろをばうしなわんとするけしきなり。なにのつみにかくははからふぞ。しさいをかたれ。さてこそいかにもなるべけれ」

とおほせける。じやけんのものゝふとはいへども、御いたわしくやおもひ（一六オ）けん、ことのしさいをくわしく申ければ、わかぎみ、

「我、命をとらるゝ事は露ちりほどもおしからず。はゝうへのたづねなげきたまわん事をおもひやるこそかなしけれ。まろむなしくなりなば、たれかはなぐさめまいらせん。物おそろしきたにのいほりにも我をともにてこそおはせしに、あすよりのちはたれをわがともよび給ふべきぞ。これをおもひつゞくるにすゞろに命のおしけれども、なんぢらがたすくまじければ一すじにおもひきるべし。かた時もかくてあれば、はゝうへのこいしさに中〳〵心のみだるゝぞ。いけてものをおもわせんより、とう〳〵うしなへ」

とおほせける。

八月十六日の月さしいでゝ、くまなくいわんかたなうあわれにすみのぼるそらをつくゞくとまぼりて、今をさいごとおぼしめすわかぎみの心のうち、おもひやるこそいたわしけれ。たゞおぼしめす事とては、はゝぎみの御ことなり。よな〳〵いだかれ給ひしあま君のふところのうちも今さらなつかしく、はゝうへのうつくしかりし御おもかげは身にひしとたちそふ心ちして、こいしさのせんかたなくしのびのなみだのながれいづるを、人によわげをみせじとや、御そでしておしぬぐいさらぬていに（一六ウ）もてなし、

「とてもたすけざる上は、とく〳〵きもをとれ」

とて、おしはだぬがせ給ひ、にしにむかいちいさううつくしきてをあわせ、めをふさぎてまち給ふ。さらでだによに

うつくしき御かたちの、月のひかりにかゞやきてゆきのはだへはすきとをり、くもりなくめでたうおはしければ、いづくにつるぎをたつべしともおぼへず、たけきものゝふどももなみだにくれてぞいたりける。此さぶらひどもいふやう、

「世の中にほうこうほどかなしき事はあらじ。君のぎよいにしたがはんとて、かゝるいたわしきめをみる事のかなしさよ。いかゞおもひ給ふ。かたぐ、此人のいきぎもをとることはいかにもかなふまじ。これゆへきみの御かんだうかうぶらんはいかゞせん。いさ、たすけてかへらん」

といひあわせつゝ、わかぎみに申やう、

「たゞ今がいしたてまつらんとなんせしかども、あまり御いたわしく候へばたすけまいらせ候。御すみかはいづくにて候ぞ。おくり申さん」

と申ければ、わかぎみきこしめし、

「うれしうもたすくる物かな。わがすみかは人のかよふべき所にもあらず。一のたにの山なかまでおくりてえさせよ」

と仰ければ、

「うけ給候」

とて（一七才）、又かたむまに打のせ申。一のたにへわけ入、くだんの所におきてぞかへりける。

ぞくのくちくさみにみめば、くわほうのもといとはよくいひふれたること葉なり。北のかたもわかぎみもかたちのすぐれ給へるゆへに、あやうき命をたすかり給へり。姫君はわかぎみをまちかね、日くれはてゝ後たづね出給ひけるが、七とせがあひだ此いほりの外へはあからさまにもいで給わで、こよひはじめの事なれば行べきかたもしらくも

の、たな引山のふもとたづきもしらぬたに〳〵を、かなたこなたとふみまよふ。み山おろしの身にしみて、なみだもよほすたきのおと、物おそろしき山路をよすがらたづね給へども、その行かたのおわせねば、すそのにいでゝみたまへど、こゝにもさらにみへたまわず。こごゑによふで御らんずれど、やかんのものゝこゑならではたそとこたふる物もなし。さてはきつね、おほかみにくわねけるにこそと、かなしみのなみだせきあへず。やけいのつゆにあらそひて、御そでをしぼり給ひけり。よあけてたづねたまへど、それぞと思ふ人もなし（一七ウ）。あまりせんほうつきはてゝ、とあるきのねにたをふし（ママ）、しばらくたへ入給ひぬ。これをばしらでわかぎみいそぎいほりへたちかへり、

「さこそはゝうへ、まちどをにおわしつらん」

とて入て御らんずれど人もなし。おさなき心にも、「こわそもいつのならひにいづちへおわしけん。われをまちかねてたづねに出給ひつるにや」と、このもかのもをみ給へどおわせねば、わかぎみあまりのかなしさに、みねにのぼりたにゝくだりこゑをばかりにさけび給ふ。みねにてよばわり給ふこゑがたにゝひゞきてきこへければ、はゝうへのおわするとてはしりおりて御らんずれど、たに水のおとより外はこたふる物はなかりけり。こゝにもはゝのましまさぬはいかゞせんと、なきたまふこゑのみねにひゞきてきこふれば、たうげにこそおわすれとて又はしりあがりてみ給へど、さつ〳〵とふく松風ならではことといかわす物もなし。あまりにたどり給ふほどに御あしをばふみそんじ、玉ぼこの道しばもみなくれなゐにぞなりにける。

かゝりし所にこんゑ左大将どの御りうぐわんの事により、すみよしへしやさんあり。げかうの折ふし、つい（一八オ）でながらなにわあたり、一のたになどけん物したまひけるが、一のたにの山中にて姫君をみつけさしよりて御らんずれば、いとあてやかなる女ばうのしをん色のきぬのなれたるをきて、木のねにたをれゐたり。大しやう何物にやとよく〳〵御らんずるに、りうはつのかんざしくろうたをやかに、はくせつのはだへうるはしく、何心もなくふしたる

かほのにほひあたりへもみち〳〵て、又なくめづらしき人の有さまなり。大将殿、「此山へかやうの人のおはする事のふしぎさよ。もしへんげの物か、人げんの心をたぶらかさんためのしわざにや」としばしまぼりたまへど、みじろぎもせず。すさまじげなる事などの露斗もなければ、ちかくへよりはだへをさぐりてみ給ふに、たゞひへにひへはてゝたへいりたる人なりけり。「こわあさまし」とおぼしめし、ひざにかきのせてかほに水そゝぎ、口にくすりをふくめなどし給ふほどに少いきいでたり。大しやううれしくおぼしめし、「何ともあれ、此人をかんびやうし人となしなば、わがものにせばや」とおぼしめしけるあいだ、くるまにいだきのせさとに出て、とある宿をかりていれたまひ、身（一八ウ）づからもそこにやどりてさま〴〵にあつかい給へど、二、三日は人心ちもなかりけり。

此宿に四十あまりなる女ばうと、二十六、七なる女ばうのやどりていたりけるが、しやうじのひまより姫君をみまいらせさめ〴〵となきければ、大将殿ふしぎにおぼしめし二人の女をめしいだし、ことのしさいをとい給へば、

「此あつかいきこへさせ給ふ姫君は、みづからがやしないぎみにて候。こまかなる御事はかさねて申候べし。まづ姫君を、わらはあつかはせてたまり（ママ）候へ」

とてせんかたなげになきければ、大将殿もあわれにおぼしめし二人のものをめしいれて、かんびやうせさせ給ひけり。四、五日ありて姫ぎみやう〳〵人心いでき給ひて、あたりをみまわし給へばたいふのめのとゝ中将御枕にそふてゐたり。あまりの事に女君は物ものたまはずなき給ひければ、二人の女ばうもそでをぬらし、七とせがあひだこゝかしことさすらへ君の御ゆくゑをたづね申せし事ども、しやうぐんの御よにいで給ひしをもかたりければ、姫君はまたすまの浦にすてられしより、にこうのはぐゝみしだい、わかぎみをみうしない給ひし事どものたまひつゞけて、いとよわげになき（一九オ）給ひけり。

しだいに御心ちさわやかになり給へば、大しやう殿ちかづきより給ひ、

「御行ゑいかなる人にてましますぞ」

とい給へど、ひめぎみはつゝましげにしてかたり給わぬを、たいふみまいらせ、

「すでにむなしくならせ給ひしを、かほどまでにたすけまいらせさせ給へる御命のおやにてわたせ給へば、何かはつゝませ給ふべき。かたりまいらせさぶらわん」

とて、くるすのにおひ出給ひし事よりはじめ、こまぐゝと申ければ、大将殿大きにおどろき、

「今までたれ人にやとおもひしに、わがいもうとにてましますよな。こんゑおほきおとゞのちやくし、左大将もろつぐとは何がしが事なり。おもひもよらずめぐりあいまいらせし事、うれしうこそ候へ」

とて、なみだぐみ給へば、ひめぎみもなつかしきほどに打なき給ふけはひ、あてになまめかしくあいぎやうこぼるばかりにてわかうらうたきを、もろつぐこうまぼりて、これを我いもうとゝおもふはかぎりなくうれしうおぼされけり。まして大とのゝきこしめしよろこばん事をおぼしめすに、とくきかせたてまつりたければ、引つれてのぼり給へり。

姫君はあけくれこひ（一九ウ）しうみまほしかりしちゝおとゞにたいめんあらんは、かぎりなくうれしけれど、おもわずなる世のさはぎにあい給ひつる事を、さすがはづかしくぞおぼしめされける。大とのは北のかたにもすぎおくれさせ給ひてものさびしくおぼしめしけるまゝに、姫君の一人もおはしまさぬ御事を此比はいとゞなげかせ給ひ、こきたのかたの御めいをさへやしないまいらせられてかしづき給ふものゝ、おり〳〵にはきんだちにむかいてのたまふやう、

「せんねんしのびたる人のはらに姫を一人もうけたりしを、あそんたちがはゝ物ねたみふかくありしにより、それをはゞかりはゝもろともにかきけちうせしなり。ちごのかほつきのめづらしきまでらうたかりしかば、我もおしうほいなくてずいぶんたづねしかども、ついに行かたなかりしか。かのなでしこのいかなるかきねにかおひいづら

ん。もしたづねいでなば、いか斗うれしからん。まどのうちのひかりにもてかしづかん物を」
とぞ仰ける。
大将殿いもうとの君をば我御かたにおき、大とのへまいり給ひ、
「すみよしもふでのげかうに、しかぐ〳〵の人をみつけ侍りぬ」
とかたりきこへ給へば、とのきこしめしもあへず、
「そはそもいづくにはふれゐけん。あわれなりける事ども（二〇オ）かな。とし月こいしうおもひ出ぬ折なく、神仏にも申せしが、ほんぐわんかないぬるは」
と、大しやうのおもひたまいしもしるくあわたゞしげによろこび給ひけり。かた時もはやくみまほしがらせ給へば、そのよとのへわたしまいらせ給ふ。ひめぎみ日比ゆめにだにみんとねがい給ひし御おやに、うつゝの御たいめんおわしましうれしきにも、まづしほたれ給へり。おとゞは此きみ三つ斗にて御らんぜしまゝなれば、その人ともみしり給わねど、かたちのまほにうつくしくおわするを御らんずる御心のうち、いか斗かおわしけん。御なみだせきあへさせ給わず、こはゝ御ぜんの御事などおほせいでゝ、たがいにむせかへらせ給ふを、みたてまつる女ばうたちもあわれにおもひやりて、そでをぞぬらしける。たいふのめのと御まへにいでゝ、山ふところにおひいで給ひし有さま、御はゝぎみ御さいごの時のあわれなりし事など、こまぐとかたりきこへさするに、とのはたゞ今の御心ちしてやう〳〵御そでもしぼる斗にみへ給ひぬ。三つば四つばにとのづくりしたるしんでんのみなみおもてをいとゞみがきつくろひて、姫君をすませまいらせられけり。はじめやしない給ひしひめぎみをば、ひん（二〇ウ）がしのたいにおき給へり。おとゞは日々にしんでんへわたりて御らんずるに、姫君の御かたちもてなしよりはじめ、いづくがいづくまでもいさゝかおくれたる所なく、あてになまめかしくけだかうらうたげなりければ、おもふさまにうれしくおぼしめしながら、

今すこしのすくせつたなくて、たゞ人になしたるをあかず口おしくおぼしめされけり。女御、きさきの外は、しやうぐんしつにましたる事なけれど、今出川殿とこんゑ殿はせつしやうのあらそひによつて御中ふはにましくけるゆへ、したりがほにしやうぐんをむこにとり給わんもむねいたく、そのうへ院のひめ宮にあいぐし、上くわうなゝめならずもてかしづかせ給ふに、それにきしろいてもてあつかわんもみぐるしかりなん。さりとてこと人にいひあわせんもものくるおしければ、「さだふさきゝつけたづねよらんまではさたなくてあらん」とぞおぼしめされける。

おとゞは大かたしんでんにのみおはして、姫君をまたなき玉のひかりとうつくしみ給ふ事なゝめならぬを、君はあわれにかたじけなくおぼししらるゝにつけても、みうしない給ひしわかぎみの御事をつきせずなげき給ひければ、かの山へ人をつかはしたづねさせ給へど、さらにみへさせ給（二一オ）わず。姫ぎみかなしみ給ふ事かぎりなく、おほくのとし月こいしうしのばしかりし人は、おもふさまの世にいでゝやんごとなきしなにさへさだまり給へるときけば、数ならぬ身をば今さらおもひいづる事もあらじ。そのかみはさすが心ざしあさくはなかりしが、ふちせにかはる人の心今さらうらめしく、大なごんをつらき人とぞおぼされける。よとゝも物おもわしげにうちむつけてのみおわしけるを、ちゝおとゞは心ぐるしく御らんじて、

「たいのひめぎみなど打かたらひあそび給わんに、よきあわひの人ぞ。今よりはたいめんしたまへ」

とて、ひんがしのたいへおとゞより御せうそこきこへ給ふ。

たいには此ごろめづらしき御かしづきに、こなたをばおぼしもいでずとなまうらめしげにおぼしたれど、わざと御むかへたてまつり給ひつれば、すなわちわたり給へり。此人は物さわやかにはれぐしき御心ばへなれば、はじめてのおりよりいとなれくしくむつびて、此のちはたへずおとづれかはしてあそび給ひけり。おとどしんでんのきみにおほせけるは、

「君のはゝ、きんのことをなんたぐいなく引侍りしか。此とし月あまたの人の引侍るをきゝさぶらへども、そのきんのねにたる（二一ウ）べうおとをもきゝ侍らず。君にはさだめてつたへおきけん。つれ〴〵なる折〳〵は、などかきならし給わぬぞ。か斗なる身のほどにかゝることこのまぬは、玉のきずに人もいひなしはべらんに」

とてきんの御ことめしよせて、

「それ〳〵」

とすすめ給へば、姫君すこしわらひて、

「はゝのおわせし時は、つたなきかたことを折〳〵かきならし候らひつるが、そのゝちはかきたへ、まして今はあとなくわすれ侍りぬ」

とはづかしげにのたまふさま、いとめやすくらうたきを、おやの御めにはいかにうつくしとおぼしけん、打まぼりて、

「わすれたまいなば、大将、中なごんなどにおしへきこへさせん。まづ引たまへ」

と仰ければ、いたうもゑしぶり給わで、いとのいたくゆるびたるをばんしきにしらべて、少かきならし給ふつまおとたゞむかしの人のきんのねにたがはぬに、これは今少上ずめきおかしき手をさへ引まし給へば、おとゞきこしめしおどろき、

「君のはゝの引侍りしをさへ今の世にはめづらしくおぼえ侍りしに、こよなうつまおとのまさり給へるはゆゝしうこそ侍れ。たゞ今のそらのけしきは、かならずものゝねはへぬべくおぼへ侍る。たゞにはいかでながめ給わん。今すこしきゝ所有てを引給ひて（二二オ）、おきなをなぐさめ給へ」

などのたまふ所へ、大将殿、中なごんの君などおはしたり。

此中なごんは大とのゝ御ためにはおいにておわしけるが、まだ二ばにて御ちゝはゝにおくれ、みなしごにてましくけるを、このとのやういくましくけり。せいじんしたまふまゝに、かたち心ざま今の御代にはならぶ人すくなく、しいかくわんげんの道をはじめ何事もすぐれ給へり。ことに御こゑめづらしくめでたうおはしけり。此君しんでんの姫ぎみを御らんじそめつるより、人しれず御心にかゝりてむねをこがし給へど、御はらからとかしづき給へばいひいづべきさまにもあらず。ねんじすぐし給へど、御心のうちは岩もる水のわきかへり給ひける。

おとゞ、きんだちを御らんじ、

「おのくはよき折ふしにおはしつるかな。ふえものし給はゞふきて、ひめぎみのことをすゝめ給へ」

と有ければ、大将殿かしこまりかんぢくのようでうとりいだしふき給ふが、くもゐにすみのぼりていとおもしろし。ひめぎみはきんだちのきゝ給わん事のいとゞつゝましければ、とみにもてふれ給わぬを、ひがしの御かたそゞろかなるきみにてびはをかいしらべてすゝめ給へば、やうくかきならし給ふつまおと、あてにけだかうあいぎやうづきてあわれになつかしきを（二二ウ）、中なごん殿きくにたへずやおもわれけん、あふぎをならしさうがし給ふ御こゑ、がれうびんがともいひつべし。おとゞも御こゑくわへてたすけ給へり。ものゝねどもすみわたりあわれにおもしろかりければ、おひ人どもははな打かみいたくしほれけり。ゑてんらくを二かへりばかり引てやみ給ひぬれば、みなくのこりおほかる心ちし給ひぬ。御せうとのきんだちもきんのねきこしめして、姫君かたちこそさきのよのかい力にて卅二さうそなはりてむまれいで給わめ、山ふところにおい出たまひつればかやうのあそびわざなどはあなづらはしかりしに、かくおもひの外なればみなくおどろき給ふ。中なごん殿はこと事もおもわすれずきちやうのうちのみゆかしくてまぼり給ふに、おりにあいたるきぬのそでにかさなり、きちやうに少はづれておわするやうだい、かんざしのかゝりなどみるたびにうつくしげなれば、外さまへめもうつらずみ給ふほどに御めをみあせ給ひぬ。ひめぎみは御かほあかう

なりそばみ給へるつらつきなど、いやめづらかなるさまし給へれば、れいのむねつぶ〳〵とふさがる心ちしてなみだのおぼへずいでくるを、とかくまぎらはしてたち給ひぬ。うわべは御せうとの（二三オ）御心ざしあさからぬやうにとぶらいきこへ給ふほどに、御めのとなどは、「ありがたき御心ばへ」とよろこぶ。姫君は御らんじしることゞもや有けん、御たいめんの折〳〵もけどをくもてなし、きちやう引よせておはしけるを、中なごん殿はねたくうらめしくぞおもわれける。

たかくら殿はおもふ人をたづね出たまわねば、何となく世の中うらめしくおもひくんじ、人しれずねやのかたはらさびしき心ちし、宮の御かたへまいり給ふよな〳〵も、打かしこまりたるていにて心とけたるけしきにもあらねば、宮もあやしうはしたなくおぼしめし、やわらかにぬるよはなくてと、御なげきがちにてあかさせ給ふ事のみおほかりけり。

ある夕つかたしやうぐんうちよりまかで給ふとて、こんゑどのゝまへをすぎ給ひけるが、此とのゝもみぢやう〳〵色づきこずへ物ふりおくゆかしげなるけしきを、さらぬだにゆかりのくさもなつかしきあたりと、御めとゞめてやすらひ給ふに、びは、きんのこと引あわせてあそぶおときこゆ。びははつねもきゝ給ひしばちおとなるに、ことのねめづらかなる心ちすればれいならず□（こゝカ）ちとゞまりてきゝ給ふに、此心つくし給へる人のつまおとにいさゝかもたがはず（二三ウ）。いとふしぎなれば御ともの人〳〵をばかしこにおきて、たゞひとりみなみのかたへあゆみて御らんずるに、くるまよせのもんひろくあきてことさら人もなきがうれしくて入てみ給ふに、しんでんのみなみおもてのみかうしどもあげわたし、ひろゑんに女ばうあまたなみゐたり。おくのかたにものゝね共きこゆるを、つき山のこぐらき中よりのぞき給ふ。みる人ありともしらでそぼれあそぶが、くまなくみとをされけり。びはを引たるはなでしこのふたへおりものゝきぬに、はかまあざやかにきなし、色しろくかみつやゝかにながく、きぬのすそにあまりたれどこちた

うはあらで、さはらかにかゝりたるかたのかゝりなどつたなからず、にぎわゝしくあいぎやうづきておかしげなり。人〳〵の物がたりきこゆるを、さは〳〵といらへ打してわらひたるまみ口つきなど、さすがにくからぬ人とみゆ。今ひとりは少引入、をみなへしの五きぬにうす色のこうちぎをきてことをばをしやり、も屋の中はしらによりゐたるやうだいかしらつきよになくうつくしく、御心をつくし給ふ人にようおぼへたるを、ひがめにやとまぼり給ふにたゞ(ママ)そなりけり。みしおりよりいたうねびとゝのをり、い（二四オ）ろはすきとをるやうにしろく、かみはくろうこちたくながらおひなりて、こうちぎのすそにたゝなはれたるほどにる物なくめでたし。とし月いたく物おもひけるとみへて、おもやせたるかほつきいとゞにほひくはゝりみどころおほく、人〳〵ははかなきたはぶれなどいひかはしわらひあへれど、此君は物もいわずそらをつく〴〵とながめたるまみのうちけぶり、心おそしとおもへるけはひのしめやかなるは、ありしながらにけだかうなつかしきさましたるを、うたがいなくそれと御らんじしめたるしやうぐんの御心、ゆめの心ちしておわするに、姫ぎみはやがていざり入給ふをあかず口おしくおぼしけれど、かいなくてかへり給ひぬ。

行ゑなかりし人をめにちかく御らんじうれしさたぐいなけれど、でんかとこんゑどの御中ふはにまし〳〵ければ、「いかゞあらん」とおぼつかなくおぼしめされけり。「まぢかくめぐりきたるものか、いまゝでおとづれぬは宮の御事などをきゝて、我をうらめしくおもひてにこそ」など、さま〴〵におもひいたらぬ事なふおぼしつゞくるに、ゆくゑなかりし時よりもいとゞこいしく、なつかしき事いわんかたなし。□（虫損）はうつし心もなくほれ〳〵しきまでおもひみだれ給へるを、たんごのめのと(二四ウ)此よしをきゝ、さしもわりなき御中なりしかばことはりにいとおしくて、まん所へしか〳〵のよしきこへしらせたてまつれば、まん所やがてでんかへのたまひけり。殿きこしめし、

「その人ゆへにさだふさもいたうおもひくづおれた□（リカ）とみゆれば、しづかなる所へむかへて大なごんが心をもなぐ

さめたくはおもへども、かのちゝおとゞ物花やかにするとなる人なれば、人しれずなどはわたしたまわじ。さりとて此事ゆへにひごろのしいしゆなごりなくむつびよらんも人わろかるべし。その人此よにありとだにきけば、まづ心やすく侍る。今しばし世のありさまみすへてはからいはべらん」

とぞ仰ける。

しやうこくのかくのたまふときこしめし、しやうぐん「大とのゝ御ゆるしなきには、我いかでおりたゝん」と、えしもいひいでたまわず日をおくり給ふほどに、こひしさのいやまさにのみなりゆけば、むかしより御心しりのでわの六郎にかたらひ給ふ。たかしげとかくみやびをもとめて君の御ふみをたまわり、わたくしのせうそこをそへて中将の君がもとへつかわしたり。中将いとめづらしくて、やがて御ふみとりいれさうじみにひろげてみせたてまつる。御らんずるにつけてもおぼしめしいづる事さまぐ(二五オ)あれば、つらきながらもさすがなつかしくてうちかへし〳〵み給ふに、御なみだのほろ〳〵とこぼるゝをさらぬやうにまぎらはし給ふ御てつき、かへでとかやいふものゝやうにておかしげなり。

「御へんじ」

と申せば、

「そこにはからいてかき給へ。けふは心ちなやましうて」

と仰けるを、中将しいて、

「御身づからきこへさせ給へ。今さらへだてさせ給ふべき御中にも侍らず」

などきこへしらせ申せば、やう〳〵御まくらもたげて、その御ふみのうらにふるごとをたゞ一しゆあそばしけるをつゝみてたてまつりぬ。大なごん殿いそぎ御らんずるに、ことばゝなくて、

わすらるゝ身をばおもわずちかいてし人の命のおしくもあるかな　一

とばかりすみつきほのかにかき給へり。そのかみだにおひさきみへておかしげなりしての、いとゞうつくしうみどころおほくなりまさり、筆のながれ、もじやうなどゆふ〳〵と上ずめきて、此ごろ人のめでのゝしる女五の宮の御てよりはこよなうまさりてみゆるは、我あながちにおもひしみけるめからにやと打もおかずみ給ふに、らうたげなるおもかげはたゞこゝもとにある心（二五ウ）ちしていみじうなつかしければ、そのよも宮の御かたへはまいり給わず、わが御かたにつく〴〵とながめふして、「わすらるゝ身と有しは、げにさぞうらめしくおもふらんかし。人の命といひつるは、我をもさすがわすれがたくこひしうおもひいづる折〳〵もありなん」などさま〴〵のことゞもおぼしつゞくるほどに、露まどろまれ給わず。

かやうにてあかし給ふよな〳〵おほかりければ、こひわびては中将の君をせめわたり給ふ。中将せんかたなさに、たいふにかくとかたる。めのともことわりにいとおしくてさうじみにもきこへさすれば、「ちゝの御ゆるしなきあいだは、いかにも〳〵あるまじき事」ともてはなれて仰けれど、しやうぐんは、

「さもおぼさず。おとゞの御ゆるしこそなくとも、いさゝかのたいめんばかりは何かくるしからん。おとゞもにくみ給ふまじき物どものさぶらへば、ついにたにんとはなしはてたまわじ。いかにもしのびて道引たまへ」

とことわりをつゞけて、中将がもとへのたまいつかはされければ、めのともいたわしくおもひてある夜道引入てけり。大なごん殿うれしさたぐいなく、しのび入しんでんのかうしのもとによりみすのひまよりまづのぞき給へば、あなたおもてに此比まいりつどふたる女（二六オ）ばうとおぼしくて、めやすきかぎり十五、六人あつまりゐて、ご、すごろくなどうつなるべし。たいふが心しりとみへて、おまへにはわらは二、三人おかしげなるとのゐすがたにてゐたり。君はしろき御ぞにくれなゐのこししどけなげにて、しろうおかしげなるかいなをまくらにてそびやかにふしたる

が、みるたびにらうたくひかりさしそふこゝちし、むかしよりはおとなびたる物から、としのほどよりははるかにわかうかたなりにうつくしく、物心ぼそげにてなみだを一めうけながら火を打まぼりたるかほのにほひ、ありたがきまでみゆるを、めのとみおこせて、

「あがきみや、あまりな物おぼしそ。今こそおぼしめす事たがふやうに候とも、おとゞのかばかりあかぬ事なふもてかしづかせ給へば、めでたうおはしまさんに」

などいふを、はづかしとおもへるけしきにて、おくのかたへいざり入、ちいさききちやう引よせてかいふし給ひぬ。ありつる人〳〵もこゝかしこに引入やすむおとしければ、中将いできて大なごん殿を入たてまつりけり。

くるすのへおわしそめし時おぼしいでられてくらきかたよりはいより給ふを、姫君ふとみつけたれどもわきまへず、此つねにたゞならぬけしきみせ給ふ御せう（二六ウ）との中なごんの君なめりとむね打さわぎ、おきてわたどのゝわきなるざうしのうちへはい入かけがねをかけ給ひぬ。おとこぎみはわれとしりてかくれ給ひたるとこゝろへ、ねたうつらきことといわんかたなければ、やをらざうしのそばへより、

「おさなの御ふるまいや。かほどまでつらきものにおもひはてられぬる身こそうらめしく侍れ。でんか此おとゞなどの御ゆるしなきに、なめげなることはゆめ〳〵侍らじ。きみもおぼししるらんやうに、むかしより又たぐいなくおもひそめまいらせしかば、ことかたへうつろふ心はいさゝかもはべらねども、うきよのならひおもひの外なるしなにさだまり侍るを、うらめしうおぼしめすらんが、さだふさはめでたきすくせともさらにぞんじはんべらず。御ことのみこいしう侍るゆへ、たがいにうきめみしとし月の物がたりをも、人づてならできこえんためしのびまいり候に、なさなくもふりすて給へるかな」

とて、まことにせんかたなげなるけしきを、しやうぐんときゝしり給ひ、さすがこいしうなきにしもあらねば女ぎみ

も打なき給ふけはひ、あくまでものやわらかにむかしにたがはずなつかしうきこゆれば、大なごん殿たへかねて、

「たゞこゝをあけさせ給へ」

とわび給ふに、女君もいとうはやらひがたくてあけんとおぼしける所に、

「此とのゝとなりに火いでたり」

とてでん中さはぎ、女ばうのあるかぎりこなたへまいるおときこゆれば、しやうぐん力およばずたちいで給へど、大みかどには人おほくたちこみて出給ふべきやうなく、北のごもんへまわりて御らんずればじやうをさゝれたり。にしみなみのもんにも人おほければ、又きたのもんへよりてくわんぬきに御手をかけ、さしもたかきついぢをいとかろげにはねこへてぞかへらせ給ひける。かゝるはやわざなかりせば、からきめにあい給わんとおぼへける。

すでにこんゑ殿へみやう火おほひかゝらんとすれば、姫ぎみたちをば御こしにて左大将殿の御所へうつしまいらせられけり。されど火もほどなふしづまり、こんゑどのつゝがなくおはしければ、あくる日かへらせたまひぬ。ひるつかたおとゞしんでんへわたらせ給へれば、さうじみはひるねしておはせしが、ふとおどろきおきあがり給ふ。かほのあかう打かほりたるが、中〳〵おかしげなるをおとゞうつくしと御らんじ、

「よべはいかにおどろき給ひけん」

などきこへ給ふに、たいふまいりてとかく御いらへきこゆ。いとめやすき御めのとにてぞ侍りける（二七ウ）。御きちやうの下にもみぢがさねのかみにかきたる文のあるを、大とのとりて御らんずれば、ことばいとこまやかにておくに、

いにしへはこへけるものを今さらに何かたむらんあふさかのせき　二

とかきたるて、こゝらの人の中ににたるもなくあてになまめかしき物から、もじつようかぎりなき上ずとみへたり。

うたがいなきしやうぐんのふみと御らんじしりたれば、さしやりて、

「おさなき人〳〵もある中なれば、ついにはわたしきこへんとおもへど、でんかゆるしなきやうにのたまふときけば、しばしは我もゆるさじとおもふなり。そのほどは、かやうなる物をもしげくはとりいるな」

とたいふに仰けるを、姫君はづかしとおぼしてそばみ給へるに、ふくだまりたるかんざしのゆら〳〵とこぼれかゝりたるが、いとをよりかけたるやうにらうたくおわするを、あさ夕さしむかいみたてまつる人〳〵さへあかずめでたしとおもひけるに、ましておやの御めにはたぐいなくおかしとおぼしけるまゝに、打ゑみつゝまぼり給ひぬ。

かつらの宮ときこへさせ給ふは、一ゐんだい六のわうじ、御（二八才）はゝは女ゐんにてましませば、こ右大臣もりつなしやうぐんに御おひなり。上くわうも女院も、此宮をばうにゐさせまいらせまほしげにおぼしめされけれど、とうぎんの一のみこ太子にたゝせ給ふうへ、御力およばせ給わですぎさせ給ひける。かつらのみやひそかにおぼしめしたつ事どもや有けん、おほいのみかどの右大将をかたらは給ひ、院のくらん人みつながといふ物をしゆぎやうじやに出でたゝせ、きうしうへくだしつかはれけり。此右大将はかくれなきあく人にて、此みやにくみしたてまつりてんかをくつがへさんとたくまれけるこそおそろしけれ。しやうぐんよりだざいふにおかれけるいわせのみんぶも、ゑきれいとかやにてむなしくなりければ、おとゝの二郎たけかつにみかさのこほりをあづけらる。此二郎はあにゝかはりて大あくふだうの物なりけるが、みつながにかたらはれぎやくしんをさしはさみ、こよしもりのおとうとたちひらとが島にかくれゐたまひけるをひそかにまねきよせ、大将ぐんとかしづきへいを上させんとほつするあいだ、くにぐよりひきやくをもつてしやうぐんへ申けれども、れいのさはがぬ人にて、

「きやつがむほんにいかほどの事かあらん。おきてみよ」

とぞ仰ける。

かのかつらの宮、こんゑどのゝしんでんの君に御心をか（二八ウ）けておりたちこひわたり給へど、おとゞゆるしたまわねばわすれんとおぼしめしさませど、有し火ごとのさはぎにあにの大将のもとへおはしたりしほかげは、わすれもやられずよとゝも御心にかゝりければ、いかにせんとなげき給ふ。

霜月になりてはいわせがむほんまが〳〵しくなり、もふぜいにてせめのぼるなどゝきこへければ、でわの大郎、同二郎を大将として、六万よきさしつかはさる。出わきやうだいださいふへ打こへ、いわせとさん〳〵にたゝかいけれど、九こくはたいりやくひとつになりてふせぐほどに、でわちからにおよばず中ごくまで引しりぞき、それよりひきやくをもつて此よしきやうとへ申ける。しやうぐんきこしめし、

「やすからぬ事かな。さらばさだふさむかつてけちらすべし。せいをもよほせ」

とおほせければ、でわの三郎うけたまはり、東ごくの物どもに此よしふれければ、十日斗がうちに七まん五千よきはせまいる。此せいを引ぐし、十一月廿七日たつの天にていとをうつたち、さいかいにおもむき給ふ。

おほいのみかどの右大将此よしきゝて、かつらの宮に申されけるは、

「さだふさきうしうにむかい候上は、御みかたさだめてほろび候らひな（二九オ）ん、さあらば君の御むほんあらわれ、うきめにあわせ給わん事うたがいなし。さんもんの大しゆ、きいのくにのものどもは、しやうぐんにうらみあるにより、しぜんのことあらばみかたにまいらんと申よしうけたまはり候へば、いさやきのくにへ御とも申くだり候べし」

と申されければ、宮、

「もつともしかるべし。そのぎならば、我心かくる人をいかにもしてうばいとりくだらばやと思ふはいかに」

と有ければ、

「それこそいとやすく候へ。その姫ぎみはてんかふさうのびじんにて候。こよひのうちにとりてまいらせ候はん」とて、日比かたらひおきたまいしあくたう共をもよほし、こんゑ殿へよせられけり。でんちうには何事ともわきまへず、上を下へとかへしものにあたりまどふ斗にて出あいたゝかふものもなければ、大将心やすくうちいりひめぎみをうばいとり出給ふを、たいふとりつきなきわめきけれどかなわず。おとゞ、きんだちはかすがへしやさんのひまなれば、はか〴〵しきものもなく、少し出あふさぶらいどもをばけちらかし姫君をかきいだき、たいふのめのとをもおなしこしに打のせ、あふみぢさしてぞいそがれける。

おとゞはそのあかつき御げかうまし〳〵て、此よしをきこしめし、

「こわ口おし。いかゞせん」

となげき給へどかい（二九ウ）なし。中将がはからいにてざうしきをはしらかし、しやうぐんの御もとへしか〳〵のよしつげたりけるを、きこしめしもあへず道よりとってかへし、かっらの宮のおもむき給ふあふみぢを心ざし、むち、あぶみをあわせ、もみにもふでうち給ふほどに、大っ、打出のはまにておっつめさん〴〵にたゝかわれける。右大将あまりていたうせめられかなはじとやおもわれけん、ひめぎみのこしをもふりすてにしをさしておちられけり。しやうぐんきっと御らんじ、

「すわ大しやうのおち給ふぞ。あれにがすな、ものども、おっかけよ、つわ物」

と、まっさきにすゝんでげちし給ひければ、でわの五郎四人ばかりに十三束とってからりと打っがい、よっ引てはなっ。右大将のおしっけのいたにしたゝかにたちければ、おどろきみかへり給ふ所に二のやをはなっ。こんどはあやまたずうちかぶとにひやうっはとたち、大事のてなればしばしもたまらずむまよりまっさかさまにおちられけるを、たかみつがらうだうはしりより御くびをとりてけり。のこりしあくたうは、行かたしらずおちうせぬ。宮は御こしにて、

さかもとへおちさせ給ふ。

大なごん殿は姫君をとりかへし、なゝめならずよろこびかち時二、三どつくり（三〇オ）みやこをさしてかへられけるが、よもいたうふけければあふさか山に御ぢんをとりしばらくやすみておはします。それよりでわの四郎を御つかいにて、こんゑ殿へ申させ給ふやう、

「御てきすでにうちほろぼし候。此たびの御おんしやうには、ひごろの御かんだう御ゆるされあるべうや候。御へんじにうけたまわりたく候」

と申つかわされたりければ、おとゞきこしめし、

「いとしたりがほにいひおこせたる物かな」

とのたまふも、うれしげにみへ給ふは御ことわりにぞおはしける。

しやうぐんは姫君のこしのきはへたちより御らんずるに、ひいなをふせたるやうにてひれふしておわするを、めのとかゝへてなきゐたり。大なごん殿、

「あなうたて。今は何をかなげく。いそぎおりてやすめまいらせよ」

と仰ければ、たいふいざりいでゝ、あさましげなるはにふの小屋におましつくろふとて、

「むくつけなき御ざ所や。こゝにはいかでやすませ給ふべき」

となげくをきゝて、たかしげ、

「たいふどのゝのたまふ事こそ心へ侍らね。何せんに玉のうてなもと申ったゑて候らへば、こけのさむしろもにしきの御しとねにまさりて、君はうれしうこそおぼしめされ候らめ」

とたはぶれてわらいければ、すまんきのつわ物ども（三〇ウ）みなけうにぞ入にける。六郎がいひしもしるく、しや

うぐんは「ちりがましき御ざどころにても、おもふ人とふし給へばほどなくあけぬるこゝちしけれ」とやすらひ給ふべきならねば、北のかたをかきおこし、

「めづらしき野山のけしきをもみたまへ。きみゆへにさだふさはどゞうきめにあい候を、あはれとはおぼししらずや」

ときこへ給ふに、女君「げに」とおぼしてなみだぐみておわするかたち、あけぼのゝそらにもてはやされていひしらずうつくしげにみへ給へり。しやうぐんどゞのかつせんにあふ事も、大りやく此人ゆへなればうき人とこそおもふべきに、露斗もうとまれぬさまのしたるは、このよならぬきえんなるべしと、いとゞ御心ざしふかく二世かけてちぎりのたまひけり。

あけはてゝでわの四郎かへりまいりぬ。おとゞの御へんじには、

「きかふの御ふるまひ、中〳〵よろこび申べきやうもさぶらわず。このへんれいには、今よりのちしんじのけいやくふかくむつび候べし」

とありければしやうぐんなゝめにおぼしめし、

「此うへはきうしうのいくさしづまらんほど、姫君をばこんゑどのへあづけまいらせられん」

とて、ちかきあたりよりくるまとりよせ、たいふをもひとつにのせ、でわの六郎を御ともにまいらせられけるが（三一オ）、たかしげに仰けるは、

「きうしうのいくさおぼつかなきによつて、さだふさはこれよりすぐにつのくにへいでんと思ふなり。なんぢはこんゑどのにとゞまり、しぜんの事もあらん時は身にかへてふせげ」

とて、くつきやうのつわ物を百よ人あいそへられけり。たかしげうけたまわり、

「仰かしこまつては候らへども、わかき身にて候へばおうけいかゞ」
と申ければ、しやうぐん御けしきかわりて、
「としわかきといふ事は、御へんがいわずともさだふさしりたり。されどもおもふしさいあるにより、なんぢをとゞむるなり。とう〳〵」
とおほせければ、
「さうけ給わり候」
とて御くるまをとゞろかし、百よ人の物どもぜんご左右を打かこんでこんゑどのへいれたてまつる。おとゞあまり御よろこびあつて、くるまよせまで出むかわせ給ひけるとかや。
さてしやうぐんは、今出川殿へきのふのかつせんのしだいくわしくしるし御せうそこたてまつり給ひて、あふさか山よりつのくにへ御出あり。なんばの浦より御舟にめされける。御せい七まん五せんよき、七百八十よそうのひやうせんにとりのり、すでにともづなといておしいだす。冬のてんの事なればかぜは木をおつてはげしく、はくらうみなぎりたつことおびたゞし。かいまん〳〵たるうなばらに、ゆきの山は数しらず。おの〳〵この（三一ウ）けしきをみてふねをとゞむるものおほかりけり。しやうぐんはちつともやすらひ給わず、
「冬のひよりののどかなる事有がたし。かた〴〵はとまらばとまれ。さだふさがふねはたゞやれ」
と仰ければ、
「うけたまはり候」
とて、すいしゆ、かんとりども、ろ、かい、かぢを取なをし、大なみ、大かぜにもかまはず九こくをさしてぞおとしける。七百八十よそうの舟ども、御ざふねにおくれじとわれも〳〵といそぐほどに、十二月のはじめにはちくぜんの

くにゝ付給ひぬ。やがてだざいふへおしよせ、三日三や火いづるほどせめられければ、たけかつかなはじとやおもひけん、大将ぐんたちをあいぐし申ひごのくにへをしわたる。そこをもつゞいてせめ給へば、すわうのくにへにげにける。又おつかけてせめられければ、四国へ打こへいよのくにかうのゝしやうにとりこもる。しやうぐん此よしきこしめし、

「もの〳〵しきいわせがふるまいかな。うみはろかいのたゝんかぎり、くがはこまのあしのゆかんずる所は、たとへてんぢくしたん（ママ）へにげたりともたすけおくべきかたきかは。いづくまでもおへや」

とていよのくにへおしよせ、かうのゝじやうをたゞ一日にせめおとしたまひければ、ちくぜんの中将はらきり給ふ。よしつなはでわの太郎がてにかゝり、ついにうたれ給ひぬ。たけかつはたかすけがてにて（三二オ）いけどりけり。しやうぐんなゝめならずよろこびおぼしめし、いそぎ御上らくまし〳〵けれ。でわきやうだいはしばらくいよにとゞまり、九こくちんぜいに少々のこりしよたうどもをことゞくしづめたり。

あくる二月十三日しやうぐんみやこへ入給ふ。その有さま中〳〵ゆゝしくぞおわしける。でわの三郎、同四郎せんぢんをたまわり、二千よきにて一ばんにうつてとをる。二ばんにしやうぐんとをらせ給ふ。このみ給へる御しやうぞくなれば、あかぢのにしきのひたゝれ、くれなゐすそごの御きせなが、こがねづくりのたちに白くれなゐのさげをあしをなかにむすんでさげ、二尺八寸の打かたな十もんじにさし、くわがた打たる五まいのかぶとをゐくびにめされ、廿四さひたるそめばのやかしらだかにとつてつけ、むらしげとうのゆみのまん中にきり、きかはらげなるむまのあくまでふとうたくましき金ぷくりんのくらおかせ、ゆうちやうにめしたりけり。につぽん一のびなんが、御むま、ものゝぐにいたるまでびれいの出たちはしたまひぬ。ようがんことにうつくしく、きりやうならぶ人なく、こまもろこしはしらず我てうにおいては、ありがたき大しやうぐんかなとぞみへさせ給ひける。ちゝぶ、ほうでう三千よきにて、御

むまの左右（三二ウ）をうつてとをる。三ばんには東ごく、北こくのせいどもおもひ〳〵のむまにのり、色〳〵の物の具きて、又五千よきつゞゐたり。めづらしきけん物なれば、みやこの上下さゝめきあいて、これをみたてまつるはことわりとこそきこへけれ。しやうぐんはすぐにさんだいある。御かどぎよかんのあまりに、右大将になされけり。

きよねんさだふさ卿におひちらされ給ひしかつらの宮は、ありしさわぎにてんだいさんへにげのぼらせ給ひ、ざすの御もとにて御かざりおろさせ給ひけるが、又此比はげんぞくならせ給ひて、ほつこくの物どもにれうじをたまわるなどとさゝやきあいける。これみな一ゐん、女ゐんの御はからいなりときこへければ、それによつてしゆじやう、上くわうの御中あへてよからず。されども上は、いかにもいやすき御もてなしにてぞおわしける。

三月上じゆんの比、さいかいだうはのこりなく打したがへて、たか助、たかなり上らくしたりければ、大将殿大きによろこび給ひけり。こんゑ殿はしやうぐんきうしうのよとうことゆへなくしづめきこへまし〳〵、ことさらめでたきくらいにそなわり給ふ事どもを、でんかにもおとらずよろこび給ひぬ。ほり川の大なごんは、今出川殿へもこんゑどのへもしたしくおわする人（三三オ）なるが、両とのゝ御中をなをしたまひければ、でんか、こんゑどのもありしなごりなくめ（ママ）でうしたしき御なからひとならせたまひける。

こんゑどのには、右大しやう殿をしんでんへいれまいらせんことをいそがせ給ふ。もとよりしたしき中といひながら、我むすめとあらはれいつきの姫ともてなすうへは、あり〳〵しくむこにとりておもふさまにかしづかまほしくおぼしめしけれども、それは一ゐんのおぼしめさるゝ所はゞかりあれば、なんでんの花のさかりに花みがてらにとおぼしさだめて、やよひ十日あまり御子の三ゐ中将をもつてしやうぐんへ御せうそこきこへ給へり。「なんでんの花いつのとしよりみ所有□にてさぶらへば、これなる殿ばらが花のえんつかうまつらんとくはだて侍るを、よそにはいかできゝすぐし給わなんや」とて、

君をおきてたれかはおらんわがやどの軒ばにあまる花のにほひを　三

とのたまひつかわされたりければ、しやうぐんかしこまりうけ給わり給ひて、

此春は心のまゝに折ぞみん（三三ウ）我しめゆひし軒のさくらを　四

□（虫損）なく□（虫損）り申侍れ、口おしからぬさまにとりなして、

「たまわり候へ」

とぞのたまひける。夕つかたまいり給わんとて、かゞみにむかひびんかき打そうぞき給ふ所へ、たんごのめのとまいり、

「れいならずつくろわせ給ふは、いづくへおはしますにや」

と申ければ、

「おほきおとゞより花みにものせよとのたまふゆへまいるなり」

と仰けるけしき御心ちよげなれば、たんごもさぞとこゝろへて、

「いとめでたき御事にこそ侍れ。あけくれ此ことをこそたれもく たづねまどひ侍しに、たがためもおもふさまにうれしくさぶらふかな」

と申せば、大将殿、

「そこには何とこゝろえてよろこび給ふぞ。まろはおもひあたる事もなき物を」

とたはぶれて出給ひける。

あるじがたのきんだち、左大将、中なごん、三位中将、少将など中もんまで出むかいてぞ入まいらせられける。おのく さくらのもとにたちより、花のけうに入給へり。おとゞは右大将どのをめでたしと御らんじ、「一ゐんの御む

こにこひとらせ給ひつるをさへ、姫宮の御かたちなをすぐれたりともおもわずときくはことわりなり。みかどの御むすめといふともすぐれざらんを、此人になら（三四オ）べんはみぐるしからん。されどしんでんの君は、ならびてにげなからじ」とおもふは、心おごりにやとおぼしめされける。くれければ御かはらけまいりて御しゆえんはじまり、いづれもゑひすぎむらいのつみをもわすれつゝそぼれあそび給ふほどに、やゝふけぬればあるじのおとゞゑいにまぎらはしていりたまひぬ。左大将まらうどの御そばへより、

「いたうふけ侍りぬ。ふるさと人も衣かたしきまちわび給ひなんに、はやかへり給へかし」

とたわぶれ給へば、しやうぐん、

「これ御らん候へ。いたうゑひすぎて侍れば、えこそかへるまじう候らへ。花のもとのうたゝねは何かくるしう候べき」

とのたまひければ、あるじの大将打わらひ、

「春よりのちの御心ざしたのみがたし」

と有ければ、まらうど、

「たぐいなく心をとむる花なれば春よりのちのこずへをもみん」　五

とてゑみ給ひけるを、左大将いたくけうじて、

「さきにほふ花にこゝろのとゞまらば春より後のこずへをもとへ（三四ウ）　六

さらば御やすみ所まいらせさぶらはん。少将の朝臣御とも申せ」

とおほせければ、きんだち三人しやうぐんをいざなひまいらせて、しんでんへ道引給ふ。

わたどのゝ戸おしあくるよりふきくるおひかぜ心ことにかほり、うちのしつらひをはじめなにごともきゝしにたが

はず、かぎりなくあがめかしづき給ふとみへて、女ばうのたちふるまいけはひなどはたゞおほやけざまにて、めやすきわかうどども三十人斗ならびゐたり。おとゞのかばかりめでたくもてなしきこへ給ふに、ひめぎみのかたちなみ〳〵ならば口おしかるべきに、たぐいなくおわするこそ物よりことにめでたけれ。中なごん殿も御おくりにおわしけるが、わたどののかたにしばしやすらひておくをみいれ給へば、大将殿みす引かづき入たまひて姫君のきちやうのかたはらにちかぐ〳〵とおはしますを、いみじううら山しくおもはれけり。さうじみもつねよりは引つくろひておはしますさま、たればかりかこれにならばんとみへさせ給へるを、大将殿打まぼりて、「みかどのみむすめ、ときの女御、きさきといへど、かゝるはありがたき世なるに、のがれがたきちぎりをむすびおきしは、我すくせもつたなからず」とおぼしめされけ（三五オ）る。ゑいにまぎらはして、とくおほとのごもりぬ。「あふさか山のくさ枕、うたてかりしをもこよひぞわすれ侍らめ」とて、ひぼときちらし引よせてふし給ひぬ。

あけぬれどおとこ君はしらずがほにておきもあがり給わぬを、北のかた「かたはらいたし」とおぼしてそゝのかし給へば、

「今だにあまりにくみ給ひそ。おとゞはよもとがめたまわじ」

などたはぶれ給ふ所へ中将まいり、

「そらのけしきはしたなく侍る。けさはれいのさほうに出させ給わめ」

と申ければ、

「あなうるさのさかしらや。ねぬよのゆめはなをのこりおほかるに」

とのたまふ御けしき、むかしよりはいたくねびまさり物〳〵しくおわするを、中将めでたしとみたてまつる。やう〳〵おきいで給へる御まみまだねぶたげにて、かぶりぎはもくつろぎびんのそゝけたるしもいとゞみるかいありてゆ

ゝしくおはしけるを、女ばうたち、

「いでやなだかきとのゝ御かたちみたてまつらん」

とてきちやうのほころびよりのぞきて、

「きゝしにたがはぬ御有さまかな。姫ぎみのよになくうつくしうおはしますに、なゝめなる御おとこのならび給ひなばむねいたからんに、おもふやうなる御ちぎりかな」

とめであへりける。中将御かゞみもてま（三五ウ）いりければ、びんかきて出給ひぬ。此のちはよなくかよひ給ひけり。されど姫君の御かたへもかはるけぢめなくまいり給へば、院のとがめさせ給ふべきやうもなく、人もそしり申さゞりけり。

ひめ宮は、大将の野中のしみづたづねいでたまいしときこしめしつるより、ねたううらめしくおぼしむすぼゝれけるが、あまさへ今は心やすくかよひ給ふときかせたまひては、いとゞむねいたくおぼしめしけれど、こなたをもかはらぬさまにかしこまりもてなし給へば、打いでゝもうらみにくゝ御心ぐるしくおぼされける。宮の御めのとなどさしつどひていふやう、

「しやうぐんはあくまでかしこき君にてましますゆへ、院の御とがめ、よのそしりをうけじため宮をもかわらぬさまにもてなしたまへど、御心ざしはさしもふかゝらぬとみへたり。何ごとも人にすぐれ世になくめでたき野中のし水に御心ざしのふかさまさり給はゞ、こなたはあさゝこそまさらせたまはめ。うわべをうつくしうつくり給ふとも、かよわせ給ふ事もあなたはしげからん」

などゝうたがいて、こんゑどのゝあたりに人をつけてまぼらせけり。大将殿此よしきこしめし、「あなむつかし。くねくしきかたさまよりぬるよ（三六オ）の数をさへかぞへられんより、とくしてたかくらへむかへとらばや」とお

ぼしめし、とのゝうちをいみじうみがきたてゝみな月の比わたし給わんよし申給へど、しんでんのきみ御さんつき八月にあたらせ給へば、「それすぎて」とてわたしまいられず。宮にはねたうおぼしめしみだるゝゆへにや、うらみねの御ゆめにもこんゑどのゝ姫君なりとて、わかううつくしき人のいみじうかしづかれてゐたるを、行てはとかくさいなむと御らんずる折〳〵おほかりけり。こんゑ殿にはみな月のころよりれいならずなやましげにおはしければ、所〳〵にて御いのりなどせさせ給ふ。これによりしやうぐんも此比はいとゞこなたがちにのみおはしけるを、宮はれいのやすからずおぼしめされけり。

八月の中比となりてはこんゑどのに御なやみおもらせ給ふとて、おとゞしやうぐんの御らんじなげくさまいへばさらなり。姫ぎみはきちやうのうちになよ〳〵とふしくらし給ふ有さま、りふじんのかんせんでんになやみ給ひしむかしもかくやと思ひしられける。十五日のあかつきよりすでに御けしきありければ、たつときげんざどもあまためしあつめ、大ほうひほうのこりなくおこなわせた（三六ウ）まひけるほどに、でん中にはごまのけぶりみち〳〵たり。しかはあれども、御さんはとみになり給わず。さきぐはたいらかにのみものし給ひし人の、こんどかやうにましませば、御めのとなどは、

「こわいかにみなしたてまつることぞ」

といきたる心もなくまどひゐたり。御うらなどみせければ、

「しやうぐんの御かたにつき、やんごとなき女の御いきどをりふかきゆへ」

とのみ申けを、「さればよ。女五の宮の御ねたみたゞにはあらじとおもひつるに」とこゝろへはてゝ、おとゞにもきこへしらせたてまつりて、御ものゝけをのくる御いのりどもをぞ又々せさせける。姫君はたへいり給ふ事たび〳〵にて、あるかなきかによはり給ひければ、たれも〳〵御心まどわし給ひぬ。しやうぐん今は人めもえはゞかり給わず、

つと打そひて身づからかゝへあかい給ふさま、なみ〳〵の御ちぎりとはみへず。ひめぎみはくるしき中にもかく打そひておわするをみぐるしとおぼしめせど、やらい給ふべきにもあらねば、さらぬていにてあつかはれ給へり。御心のうちには、「かくうきめを人にみせまいらせ我もみんより、とくしてはゝのおわせし所へむかへ給へ」と、仏をねんじ給ふ御心のほどこそいとおしけれ。

廿一日のあけがた、みるまゝにきへ〳〵とたへいり（三七オ）給ひければ、でん中さわぎのゝしるさまおびたゞし。おとゞはさらにものもおぼへたまわず、

「こはいかにせん〳〵」

とのみぞのたまひける。あるかぎりの女ばうたちなきまどふさま、中〳〵いみじげなり。しやうぐんはあまりあへなく口おしうおぼしければ、しばらくたちもさらずまぼりおわしますに、しろき御ぞひきまとひてふし給へる枕に、所せき御ぐしのゆら〳〵とかゝりたるほど、わざとつくろひたるよりはいとゞめでたく、御はらいとたかうおわするさへおかしげにて、うちねぶりたるまみよりはじめつらつきなどいよ〳〵ありがたうおはしけるを、つく〴〵と御らんずるにおしうかなしさいふかたなく、たゞなみだの人わろきまでながれいづるを、とかうまぎらはしておわしけり。今出川殿は申におよばず、くげ、てんじやう人は御とぶらいにまいりつどひ給へり。しやうぐんかくておはしけるゆへ、おうばんの大みやう、小みやうのこらずはせさんじたり。うちにもきこしめしおどろき、

「かたちのありがたく又なふめづらしき人ときゝしに、いかにしやうぐんのなげきかなしむらんに」

とちよくぢやうあつて、めいよのくすりをさだふさこうにくだしたまわる。ちよくしにはれんぜいの大なごんまいり給へり。右大将大きに（三七ウ）かしこまりはいしたてまつり、すなはち此くすりを水にたてゝ姫君の口へふくめ給ひければ、しばらくありて少みじろぎくるしげなるいきをふきいだし給へば、たれも〳〵よろこびつゝ、又みぎのく

すりを御口へいれ給ふに、いよ〳〵いき出たまひければ、しやうぐんれん中よりたち出て、ちよくせんのありがたさを返す〳〵大なごん殿に申させ給ひける。

姫君は御心つきけれどなをくるしげにしたまひければ、おとゞあまりにたへかねたまひ、てづからくすりもておはして、

「君のくるしみをみ侍りては、しばしもながらふべき心ちもせず。ことわりのまゝにさきだゝんとこそおもひはんべれ。時のまもおきなをたいらかにてみんとおぼしめさば、これきこしめせ」

とてまいらせ給ふ。くすりまいりてたいふのめのとにとりつきおきあがり給ひ、ほどなふたいらかにものし給ふ。おとこにてさへおわしければおの〳〵いさみよろこび給へるさま、いわずともおもひやるべし。おそろしかりしなごりもなくさはやかにおわしければ、上下こゝろおちゐてよろこびあへり。おとゞはめづらしき人の御かしづきに御心をいれて、あいしうつくしみ給ふ事なゝめならず。

ほどなふ御いかにもなりければ、五十日

「此御いそぎをばたかくら殿にてせさ（三八才）せ給わん」

と仰けれども、冬のあいだはかたあしくおはしますとてわたしまいらせ給わず、こなたにていそがせ給ひけり。宮の御かたにはめでたきをきかせ給ふにつけても、御むねつぶれねたうおぼしみだるゝまゝに、御心ちもれいならずうかく〳〵となりてひが〳〵しき御事おほく、めしつかふわらはどもをもつみなきにせめかうじ給ひければ、人〳〵、

「あなうたて。いかなる御心のつかせ給へるにか」

となげきあへり。しやうぐんのおはしけるにもいたうくね〳〵しき御けしきをみせてうらみかゝり給ふが、又引かへなつかしげにざれたはぶれなどさせ給ふを、みたてまつる人〳〵、

「さしも色ふかうはづかしげなる人に、たゞ今うとみはてられさせ給ひなん」

となげくに、しやうぐんはいさゝかもうとみたるけしきにあらず、かはらぬさまにもてなし給ひぬ。

いつしかとしかへりきさらぎの比、こんゐどのゝ姫君をたかくら殿へわたし給わんとてきちにちさだめられけり。一ゐんのおぼしめされん所をはゞかり給ひて、でんかはしらずがほにておはします。まん所はわかぎみ、姫君を引ぐし、かねてよりたかくら殿へわたり給へり。こんゐどのにもしのびたる御いそぎなれど、うち〳〵の事はになくきよらをつく（三八ウ）し、その日のぎしきなどは何事もおほやけざまにしなし給へり。御はらからのきんだち出入かしづき給ふさま、めでたき御すくせとみへたり。

中なごんのきみ、「けふよりのちはみるめさへかたくなりなん」と人しれずかなしくて、「もしさりぬべきひまあらば、かくおもふ心のうち人づてならできこへしらせて、それをだに身のおもひ出にせん」と思ひありき給ふ。女ばう五十人おしなべておりものゝきぬ、こきくれなゐのはかま、うす色のからぎぬきたるすがた、いづれとなくめやすし。御むかへの人〳〵のまいるをみるとて、そなたのらうにこぞりいでゝおまへには人もなきを、中なごん殿いとうれしうてひそかにあゆみより給ふ。君はあかきからおりに白きいとをもつて糸さくらをうきもんにしたる御ぞに、うすもえぎのからぎぬ、せいがうのこきくれなゐのはかまめしたり。人〳〵のきたるはこわ〴〵しくむつかしげなるに、あくまでたを〳〵ときなし給ひて、きちやうのほころびより人〳〵のたちさはぐをのぞきてゐたまへる。やうだいいとさゝやかにかしらつきめでたく、こぼれいでたるかんざしのかゝりをはじめ、みるたびにめづらしくたぐいなき人の御有さまなり。中なごん殿御ぞのすそを引うごかし給へば、何心（三九オ）もなくみかへりたまへる御かほ、さとあかみてそのまゝうつぶし給ふがいとゞうつくしげなれば、御てをとらへていひしらぬ事どもおほくきこへ給へど、何かは御いらへのあらん。なき給ふさまのいみじければ、いたうもうらみはてず、

「かりにだにあわれをかけよさもあらばうきなにやすく身をばかへてん　七
あわれとはおぼさずとも、にくしとだに一ことおほせ候らへ。それを此よのおもひいでにし侍らん」
とてさらに御手をゆるし給わねば、姫ぎみせんかたなさに、
「たがためもおもてぶせやとなりぞせんそのはらからにうきなたちなば」　八
とほのかにのたまふほどに、おとゞおはして、
「時なりぬ。くるまよせさせよ」
など仰ければ、中なごん殿われにもあらぬ心ちして出給ひぬ。御くるま七りやう、みずいじん、とねりまでも花をおりていだしたて給へり。くれかゝるほどにたかくら殿へいらせ給ふ。わかぎみ、姫君まちつけ給ひて、むつまじうめづらしげによろこび給ふ事かぎりなし。まん所、
「北のかたの御かたちめでた（三九ウ）しとはきこしめしつれども、かほどまでとはおぼさゞりしに、かゝる人も世に有けるかや。さだふさがこいかなしみしは、ことわりにすぎたり」
とぞ仰ける。しやうぐんも今はおぼしめすまゝにうれしくて、おきふしかたらひくらし給ふ。北のかたはきんだちのおよずけ給ひつるを御らんずるにつけても、行ゑなきわかぎみの御ことをのみつきせずなげきたまいける。
やよひ中じゅんの比、かつらの宮の御むほんにより北こく大きにさうどうす。ものゝふあまたせめのぼるときこゑければみかどおどろかせ給ひ、「たれをかさしむけられん」と大将ぐんをえらませ給ふ。こゝに右大将のちやくし十二歳になり給へるが、御しんぶのあとをおひ御こゝろさかしくようがんうつくしうましくけるを、うちにてにわかに御げんぷくせさせたまひ、四ゐの侍従さだあきらとなのらせ、この君を大しやうぐんにとせんじなりければ、しやうぐんかしこまり、きちれいなればとてほうでう、ちゝぶをさぶらい大将にて、五まんよきをそへられけり。みやこ

をたつていまだきびはなる人のこし路のたびにおもむき給ふを、でんかにもこんゑどのにもおぼつかながらせ給ひける。みのゝくにまでくだり給へるに、ほつこくへ此よしきこへ宮にたのま（四〇オ）れ申せしあくたうども、かなはじとやおもひけんことぐくかうさんし、かぶとをぬいで侍従どのゝ御てにくはゝりけり。此上は宮も御ちからおよばず、又御しゆつけありひそかにのぼらせたまひ、にんわじ御むろのかたはらにかすかなる御すまひにてぞわたらせ給ひける。

此のちはしゆじやう、上くわうの御中そば〳〵しくおわしければ、院のみかど「わが御あやまり」といひながら、よの中はしたなくおぼしめさるゝまゝに御ぐしおろし、せんねんつくられたりしかつらの院にこもらせたまひければ、女五の宮は女院とひとつにおわしけるが、月日にそへて物くるおしくなりまさり給ひつゝ、つねの御さまともみへずうつゝなくまし〳〵ければ、女ゐん御らんじわびてしやうぐんのまいり給ふにもいだしまいらさせたまわねば、宮は大きになきさけび、

「うたての女院のさかしらや。こいしき人に、などあわせたまわぬぞ」

とて、ふしまろびてこがれ給ふを、人〳〵とかくなぐさめたてまつれば、やう〳〵にしづまり給へり。後には我と御ぐしをはさみおとしてあまにならせ給ふを、ほうわうのおわしますかつらのゐんへわたしまいらせられて、ひとつにすませ給ひけるこそあわれなれ。かくてのちもしやうぐんはむかしにかはる（四〇ウ）けぢめなくねんごろにおとづれまいらせ、けつくしやうゐんなどたてまつり給へば、今ぞ大将殿をありがたき人なりと、ほうわうも女ゐんもおぼしめししられけり。

しやうぐんはまい月びしやもんへさんろうありけるが、卯月初の八日くらまへまいり給へるに、べつたう出あひたてまつりよもやまの御物がたり申されけるついでに、

「ぐそうはちやうあいのちごを一人もちて候。これにつきふしぎなる事のさぶらふなり。おとゝしの八月のことにて候らいき。あるよのゆめにたう寺のほんぞんまくらがみにあり〳〵とたゝせ給ひて、たくせん有けるは、『つのくに一の谷の山中に我うち三人有。いそぎむかへてやういくせよと』御むさうをかうぶりしかば、よのあくるとひとしくかの山へわけ入たづね候ひければ、あんのごとく七八歳なるちごの世にうつくしきが、とある岩の上になきふしておわしけるを、ぐそくしてかへりやういくつかまつり侍るほどに、しよ道にいとかしこくようがんなどはならぶちごもなくさぶらふが、此ちごのまなこざしなべてならぬ有さま、たゞ君の御おさなおひに少もたがい侍らず。もしおぼしめしあたる事などはさぶらわずや」

と申されける。しやうぐん一のたにの山中ときこしめすより、「ゆくゑなくうしない候ひ（四一才）しわか君にや」といとゆかしければ、べつたうに、

「まづそのちごを一めみ侍らん」

と仰ければ、やがてよびよせ給ふ。けんもんしやのひたゝれに、せいがうの大口をき給へり。まことにまなこざしするどく、色しろうじんじやうにけだかくうつくしうぞおわしける。しやうぐん、

「こちや」

とのたまへば、ちかうまいり給ふ。御ひざにのせかみかきなでゝ、

「としはいくつになり給ふぞ。ちゝはゝをおぼへ給ふか」

ととい給へば、

「九つになり侍る。ちゝをばしりさぶらわず。はゝをばおぼへ侍る」

とのたまふさまのあてになまめかしく、口つきのかほりかみのくろうふさやかなるなどは、くるすのにてみそめし花

の夕ばへにいとようにたりければ、いよ〳〵さにこそとおぼしめし、

「そのはゝはいかやうなる人にてか侍し。何とて山にはすてられ給ひしぞ。かたりたまへ」

と有ければ、かのいきぎもとられんとし給ひし事よりはじめ、ありのまゝにかたりつゝ、

「はゝうへはかたちのすぐれてよく侍りしか」

とゆかしうおもへるけしきにて、打なみだぐみたるがあわれにらうたければ、うたがいなき我御子ときこしめすにつゝみあへずはら〳〵となき給ひて、

「われこそおことのちゝにて侍れ。はゝにあわせ侍らんに、それがしとおわせよ」

と仰ければ、わかぎみきゝ給ひ、「べったう（四一ウ）のもとなるちごどものちゝとてとぶらいくるはむくつけきかほなるに、わがちゝはわかううつくしくやんごとなき人にておはしけるよ」と、おさなき御心にもいとうれしくて、いつしか御さしぬきのすそにまつわれむつまじげなる御けしきを、みたてまつるそうども、べたうをはじめすみぞめのそでをぬらされけれ。さて右大将殿べったうにもことのしさいをくわしく仰あつて、わかぎみを引ぐしかへらせ給ひける。うへの御よろこび中〳〵かぎりなく、でんか、こんゑ殿などにもきこしめして、もてかしづき給ひぬ。

北のかたはまたことしもたゝならずおわしけるが、こぞのにこりてそのきわになるまでふかくつゝみ給ふ。されども御いのりはしのびて所〳〵にあまたせさせ給ひけるしるしにや、いさゝかのつゝがもなく八月下じゅんにひかるやうなる姫ぎみいできたまひけり。かやうにきんだちあまたになり給ひ、つぎ〳〵せいじんましますほどに、御げんぷく、御はかまぎなどゝて、ことぶきのたゆる事なくにぎわゝしく（四二オ）とめる御家のうちとみへたりけり。

くらまにて御らんじつけたりしわかぎみも、十一にて御げんぷく有。五ゐのくらん人よしふさとなのらせ給ふ。こんゑどのにてたんじやうなりしわかぎみをば、でんか御やうくんにしたまひ、すなわち御いゑをつがせ給ふ。大姫君

は十三にてとうぐうの女御にまいり給へり。いもうとの君ものちには、春宮の御おとうとくらゐにつかせ給ふ時きさきにたち給ひぬ。さだふさこう廿九と申には、左大臣ににんじ給ふ。ちやくしさだあきらもしやうぐんのせんじをかうぶり、すなわちくわんとうへ下ちやくし、むかしのかまくらにゐしやうをしめ、東かいだう、東せんだうをおさめ給へり。二なんよしふさはことにさふのあいしにて、これもしやうぐんになりてちくぜんのくにださいふへくだり、たかなり、たかすけをしつじとさだめ、九こくちんぜいをしづめ給ふ。さふはみやこにきよぢうしてうかをしゆごしたまひけり。いまだ三十にだになり給わぬ人の、御子のきんだちをば東西のしやうぐんになし、御身は花のみやこにありて一天四かいをたな心に（四二ウ）おさめ、御かどのゐいりよめでたく、くげにもぶけにもあふがれためしなきはんじやうは、たゞこれふようにちやうじ御身のきりやうすぐれ給へるゆへなり。あめが下ことゞくおさまりはてゝ、四つのうみなみしづかにふくかぜえだをならさず、たみのかまどもにぎわひめでたき御世となることも、さだふさこうの御こゝろたけくましますゆへなれば、君の御うつくしみあまねくよもつてあふぎたてまつり、此大臣の御代をば千秋万歳といのらぬ物はなかりけり（四三オ）。